

水の文化

特集

水が語る佐渡



水の文化 February 2019 No.

61



水辺は人の故郷

歌手 加藤 登紀子

心の奥にいつも川の流れの音が聞こえています。

小さな頃、京都の上賀茂で暮らした日々、上賀茂神社の杜家だった父の実家の、庭の裏にある小さな離れに寄寓していたわが家族。

終戦後満州から引き揚げて、東京でひと頑張りした父にとっては、不遇の帰還だったかもしれないけれど、子供の私には、夢のような生活でした。

白壁の家の前には百人一首に出てくる「ならの小川」が流れ、そこから家の庭に小さな川が引き込まれていました。その川は私の家の6畳間の濡れ縁のそばを流れ、そのまま隣の家へと流れて行きます。そばに柿の木がありました。

昔はこの小川で、野菜を洗ったり、食器を洗ったり、洗濯をしたりしたのでしょ。

私たちが住んだ家は、昔女人の住まいだったらしく、女子のトイレし

かなかったので、父も兄も、柿の木の下におしっこをしておきました。お客さんが来た時も、「うちは水洗トイレですから」と言って、「川のそばでどうぞ」というような風流な暮らし！

私は一人で遊ぶのが好きで、よくこの小川のほとりで飽きもせず遊んでいました。

水は絶えず音を立てて流れます。指を入れると、指の間をさやさやと水が流れるのが気持ち良くて、一瞬も止まらない水の生き生きとした感じが、大好きでした。

時々葉っぱを流してみると、同じ場所から流れてもみんなそれぞれ違う場所から流れていきます。途中で淀みにはまってくるくる回ったり、ひっくりかえったり…。

人の運命みたいなものをここで知ったような気がします。中学の時東京に引っ越し、それか

ら約60年たった今、私たちは千葉県南房総の鴨川という町の山奥に農場を持っていきます。なんとこの鴨川には加茂川という川が流れているんです。なんだか不思議な因縁。

夫・藤本敏夫が1980年の中頃からここで農業を目指し、2002年に他界した後、ここを私と、次女のYaeの一家で受け継ぎました。

ここは水の豊富な棚田で、自然に降った雨だけで十分水が足りる天水の田んぼです。水の調節は、畦に土の切り込みを入れるだけ、天然記念物のトウキョウウサンショウウオの棲む田んぼです。

正月の静けさの中で、冬水田んぼに寒月が映っています。

今もこの瑞々しい自然の中に身を置いて暮らせていることが、改めて嬉しいです。

水辺こそが私の原点。人の故郷だからです。

加藤 登紀子 (かとう ときこ)

1943年ハルビン生まれ。元 佐渡トキ環境親善大使。1965年、東京大学在学中に第2回日本アマチュアシャンソンコンクールに優勝し、歌手デビュー。「ひとり寝の子守唄」「知床旅情」「百万本のバラ」などヒット曲を世に送り出す。地球環境問題にも取り組み2000年から2011年まで環境省・UNEP 国連環境計画親善大使に就任し、アジア各地を訪れ、音楽を通じた交流を重ねる。夫・藤本敏夫が手がけた鴨川自然王国を運営し「農的生活」を推進。「土にいのちの花咲かそ」「運命の歌のジグソーパズル」など著書多数。2019年はコンサート「Love Love Love」を全国で開催。





佐渡の国中平野にある田んぼ。冬でも水を残すことで小さな命がつながり、トキのエサ場ともなる

特集 水が語る佐渡

古来、「金の島」として知られる佐渡。日本海に浮かぶこの島は、金銀はもちろんのこと、鉱山技術を応用した水利による稲作および水力（北前船）で運び出された産品によって隆盛を誇った。

金銀山の閉山・休山で基幹産業を失っても人々は暮らしつづけ、今ではトキをシンボルとするブランド米で持続可能な農業を目指している。

日本の縮図ともいわれる佐渡の歴史を「水」の視点から見つめ、「人と自然の共生」のあり方や、私たちがこれから大事にすべきものを探った。

加茂湖から大佐渡山地を望む。加茂湖はもともと淡水湖だったが、湖水の氾濫を防ぐため明治期に開削し、両津湾とつながり汽水湖となった



目次

巻頭エッセイ

2 ひとしづく

水辺は人の故郷 加藤登紀子

特集 水が語る佐渡

6 概論1

佐渡が示す人と自然の共生モデル 五十嵐敬喜

8 ジオ

二つの島がつながった金の島

10 鉱山

「排水」と「水利」から見る佐渡金銀山

—— 400年続いた鉱脈の残影 相川金銀山

15 文化的景観

佐渡最初の鉱山を繁栄させた「水」

西三川砂金山

18 棚田

江戸期の記憶留める棚田 岩首昇竜棚田

コラム 金銀山を支えた鉱山水利と食糧増産

20 伝統芸能

海を越え、育まれた芸能

22 北前船

廻船の歴史伝える濃密な空間 宿根木・小木港

コラム 宿根木の海に浮かぶ昔ながらの「たらい舟」

28 概論2

恵みを活かして「自立の島」へ

—— 佐渡の未来への提言 鈴木基之

30 生物多様性

トキよ、よみがえれ! —— 生きものひしめく共生の田んぼ

コラム なぜ佐渡の里山は世界農業遺産に認定されたか

35 文化をつくる

水の恵みと可能性に満ちた島 編集部

佐渡の概要

人口は55,331人、世帯数は23,909世帯(2019年1月1日現在)。面積は約855.61km²(東京23区の約1.5倍)。夏は高温多湿だが、冬は対馬暖流の影響で比較的温暖で降雪量も少ない。平均年間降水量も全国平均をやや下回る。歴史は古く、2万年から1万7000年前ごろの遺跡も発掘されている。また、金銀の産出で知られ、江戸時代は幕府の天領で大がかりな開発が行なわれ、17世紀には世界最大の産出量だったといわれる。現在の農業は米が中心で、約65万人分相当を生産。柿などの果樹栽培、干しいたげづくりも盛ん。漁業ではイカやブリが知られる。日本酒の蔵元も多い。2004年(平成16)年に、両津市、相川町、佐和田町、金井町、新穂村、畑野町、真野町、小木町、羽茂町および赤泊村の1市7町2村が合併し、佐渡島全体が佐渡市となった。年間の観光客数は50万人(2016年)。

※佐渡島は「佐渡」と表記する。ただし、「」内はそのときの発言に従った

連載

36 水の文化書誌51

ドナウ川—— 黒い森から黒海まで 古賀邦雄

38 魅力づくりの教え12

暮らしながら守る文化財

島根県大田市大森町 中庭光彦

42 食の風土記13

舟運と文化の蓄積がもたらした ことゆ

福島県会津若松市

45 Go! Go! 109水系16

夢を抱いた人々の開拓軸 後志利別川 坂本貴啓

50 センター活動報告

51 編集後記/ご案内
(敬称略)



佐渡が示す 人と自然の 共生モデル

佐渡の文化や歴史的価値をどう捉えればよいのだろうか。佐渡金銀山の世界文化遺産への登録準備が進むなか、五十嵐敬喜さんは「金山を支えた『無形なもの』にも着目すべき」と説く。市民による世界遺産登録運動の支援活動を各地で行なう五十嵐さんに、「庶民の労働が支えた佐渡文化」をテーマに話を伺った。

文化と自然を 兼ね備えた島

日本には、世界があつと驚くような島が二つあります。一つは沖縄本島です。琉球王国のグスクおよび関連遺産群で世界文化遺産に指定されているうえ、北部の森「やんばる」も世界自然遺産の登録準備中です（注1）。あんなに小

さな島に文化遺産と自然遺産が共存しているところは思い当たりません。

その沖縄本島と双璧をなすのが佐渡です。佐渡金銀山は世界文化遺産の国内候補地であり、トキの復活が象徴するように自然と人の営みが共存する島です。すでに世界農業遺産に登録されています。つまり、東京23区の1・5倍ほどの面積で人口6万人ほどの佐渡

は文化遺産と自然遺産の両方を兼ね備えた世界的な存在になる可能性を秘めているのです。しかも流刑地だった歴史があり、能や鬼太鼓など独自の文化も残っています。北前船の寄港地として栄えた小木港を支えた宿根木という独特な景観を保つ集落もあります。佐渡は不思議な魅力に満ちています。個々の文化や自然を評価するだけでなく、時間軸に沿って島



(上)人の手で道遊脈と呼ばれる鉱脈を削りとってできた「道遊の割戸」。割れ目は幅がおよそ30m、深さがおよそ74m (下)江戸時代の相川のまちなみを描いた「佐渡一国海岸図」(部分)。江戸と同じような町割がなされた(相川郷土博物館蔵)

インタビュー 五十嵐 敬喜さん

弁護士 法政大学名誉教授

Takayoshi Igarashi

1944年山形県生まれ。専門は都市計画、立法学、公共事業論。法政大学教授、内閣官房参与、日本景観学会会長などを歴任。不当な建築や都市計画による被害者の弁護活動に携わる。佐渡関連の著書に「甦る鉱山都市の記憶 佐渡金山を世界遺産に」(編著)がある。



佐渡金銀山関連の略年表

| 西暦 | 年号 | 出来事 |
|-------|------|---|
| 平安時代末 | | 『今昔物語集』に能登の人(砂鉄採取集団の長)が佐渡で砂金を採取したと記録される |
| 室町時代 | | 世阿弥が佐渡に配流となり、小謡集『金鳥書』を著す |
| 1460 | 寛正元 | 西三川砂金山で本格的に砂金採取が始まる |
| 1542 | 天文11 | 越後の商人により鶴子銀山の採掘が始まる |
| 1601 | 慶長6 | 鶴子銀山の山師たちによって相川金銀山が開発される |
| 1603 | 慶長8 | 大久保長安が佐渡代官になる |
| 1604 | 慶長9 | 鶴子の代官所(陣屋)を相川に移す |
| 1618 | 元和4 | 代官所を佐渡奉行所と改称する |
| 1621 | 元和7 | 佐渡で小判の製造が始まる |
| 1636 | 寛永13 | 洪水で相川の割間歩(わりまぶ)＝民間請負の抗)が冠水、260艘の樋が水埋りとなる |
| 1637 | 寛永14 | 京都から水学宗甫が来島し、水上輪のつくり方を伝授 |
| 1663 | 寛文3 | 割間歩の稼ぎを中止し、これに反対した山師や町人総代を投獄。多くの人が職を失い、3000人以上の餓死者が出る |
| 1696 | 元禄9 | 総延長およそ1kmの南沢疎水道が完成 |
| 1778 | 安永7 | 初めて江戸から無宿人60人が出雲崎を経て小木へ到着。相川金銀山で水替人足として働く |
| 1783 | 天明3 | オランダ水突道具(フランカスホイ)を排水に利用 |
| 1825 | 文政8 | 金銀山に献金した町人に苗字や屋号を名乗ることを許可 |
| 1869 | 明治2 | 佐渡金銀山が明治政府直営の「佐渡鉱山」となる |
| 1872 | 明治5 | 西三川砂金山が閉山 |
| 1887 | 明治20 | 高任選鉱場と大間港を日本初の空中ケーブルでつなぐ |
| 1892 | 明治25 | 佐渡鉱山専用の相川大間港が完成 |
| 1896 | 明治29 | 佐渡鉱山が三菱合資会社に払い下げられる |
| 1900 | 明治33 | 新潟県初の水力発電所「高任発電所」が稼働する |
| 1929 | 昭和4 | 相川で浜石の採取を始める |
| 1940 | 昭和15 | 相川北沢に東洋一の浮遊選鉱場が完成 |
| 1946 | 昭和21 | 鶴子銀山が閉山 |
| 1989 | 平成元 | 佐渡鉱山が採業を休止する |

参考文献:『佐渡金銀山展 図録』(2009)、『黄金の島を歩く—佐渡金銀山の歴史と文化—』(2010)、『再発見! 佐渡金銀山』(2018)など(いずれも新潟県&佐渡市が編集・発行)

鉱山都市・相川の陰にあるもの

全体を捉えると、別の意味合いが見えてくるかもしれません。

跡です。私は最初に見たとき感動を覚えました。人々が山の表面に出ている鉱脈を土砂ごと削りとり、山の形すら変えてしまった事実、人の営みの凄まじさ、執念といったものを感じたからです。

佐渡金銀山の中心地は相川という集落です。戦国時代には家が十数軒しかない海辺の寒村でしたが、金銀山が発見されて1601年(慶長6)に江戸幕府の直轄地となると、代官所(のち奉行所)が相川に置かれました。江戸時代前期には4〜5万人が暮らしたと推定される大都市になり、「相川には江戸の文化がすべてそろっている」とまでいわれたそうです。

そうした輝かしい繁栄を物語る資産がひしめく佐渡金銀山に、ある意味での「深みと凄み」を与えるものとして「寺院」「無宿人(注2)」「遊郭」があります。相川には寺院が多く、人口比で考えると日本有数の密度。また、坑内でもっとも過酷な排水作業にあたる水替人足として、幕府は1778年(安永7)を皮切りに1800人余りの無宿人を佐渡へ送り込みます。相川には「無宿人の墓」が残っています。1853年(嘉永6)に坑内事故で犠牲になった28人こそ墓碑があるものの、そのほかの

産業遺産を越える佐渡のストーリー

無宿人たちは名前すら記されていません。その無宿人と遊女の心中物語を作家の津村節子が『海鳴』で描いたように、「水金遊郭」など遊郭もありました。

繁栄の史跡だけでなくこうした悲劇も包み隠さず明らかにした方が、佐渡の文化の深さがより伝わると思います。金銀山はゴールドラッシュと繁栄をもたらしましたが、それは庶民の苛烈な労働によって支えられていたのですから。

明治維新で佐渡金銀山は政府直営となり、宮内庁を経て民間企業に払い下げられ、大型機械による近代化で再び大増産します。このストーリーを聞くと産業遺産に目

が向きがちですが、「人」が介在することを忘れてはなりません。

そこら湧き出る排水の技……佐渡の、特に江戸時代までの人の営みはすばらしいし、わかりやすく残っています。まるで私たちに「人間とは何者か」という命題を突きつけてくるかのようです。

そして、明治時代以降の羽根を狙った乱獲やエサ場の減少、農薬の影響などによって絶滅してしまつたトキが、佐渡で復活しました。2008年(平成20)9月に試験放鳥が始められましたが、あつたきはたった10羽です。10年経ち、野生化したトキは300羽を超えました。その陰には農家をはじめとする住民の努力と関係者の支えがありました。

トキの復活を目指し、新たに人と自然の関係をつくり直したことも、まさしく佐渡の文化です。そこには、私たちがこれから目指すべき自然との調和、生きものとの共生のモデルがあります。

(2018年12月18日取材)

(注2)無宿人

江戸時代に失踪や勤当、貧窮による離村などによって人別帳から名前を外された人のこと。18世紀後半、幕府に社会不安を起こす存在と見なされ、佐渡へ送られた。

(注1)やんばる

沖縄本島北部地域一帯を指す「山原」の通称。やんばるは世界自然遺産候補「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」の構成資産の一つであり、2020年夏の登録を目指している。



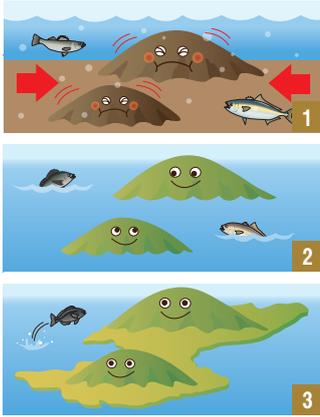
【概論1】



二つの島がつながった 金の島

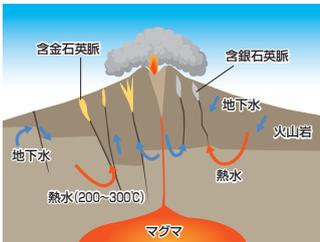
日本のいわゆる離島のなかで、佐渡は沖繩本島に次ぐ面積をもつ。金銀の鉱脈が走る二つの山地と離島には珍しい広い平野を併せもったこの島の成り立ちを紹介する。

佐渡島の成り立ち



1 海の底にあった大地に押される力が加わって隆起が始まる 2 大佐渡と小佐渡が海上に現れる 3 二つの島から流れ出した土砂で島がつながり佐渡島となる

佐渡島の金銀鉱脈



マグマで熱せられた地下水に金や銀が溶け、断層に沿って上昇し、沈殿して金銀鉱床が生まれた(イラストは市橋弥生さん提供資料と佐渡市発行のパンフレットをもとに編集部作成)



相川金山で最大の鉱脈とされる青脈。この地形は金銀が掘り尽くされた跡



激しい噴火の跡を示す球顆流紋岩。小さい粒が含まれることが特徴
片辺礫岩の岩肌。少し赤っぽい岩片が大陸の岩盤をなす花崗岩



平根崎にある貝の化石。平根崎付近の海岸。海に沈んだあと再び隆起したため、斜めになっている

佐渡が大陸の一部だったことがわかる南片辺付近の岸壁



3000万年前の 記憶が残る島

なぜ佐渡には、金銀鉱脈が豊富に存在し、島の真ん中に広大な平野があるのか。現地を歩きながら、佐渡の独特な地形や地質が生まれた背景について、佐渡市教育委員会ジオパーク推進室の市橋弥生さんに解説してもらった。



佐渡市教育委員会社会教育課ジオパーク推進室で学芸員を務める市橋弥生さん

「佐渡島と日本列島の成り立ちはよく似ています。今からおよそ3000万年前、ユーラシア大陸の東側の縁が割れ、活発な火山活動とともに陸から引き離されていきました。これが日本列島の原型です。そこには将来、佐渡島になる部分も含まれていました。今の大佐渡、小佐渡(注1)の山々は、この時の火山噴出物や溶岩でできています」と市橋さん。
佐渡が大陸の一部だった証拠が見られるという南片辺に行ってみ

(注1)大佐渡、小佐渡

北部の大佐渡山地、南部の小佐渡丘陵の略称。大佐渡の主峰は標高1172mの金北山(きんぼくさん)、小佐渡の主峰は標高646mの大地山(おおじやま)。

た。海岸の岩肌を観察すると、大小の薄赤色の石が混ざっている。

「赤っぽい岩片は、大陸の岩盤をなす花崗岩です。佐渡が大陸から切り離されはじめるとき、大陸の崖が崩れ、そこへ火砕流が流れ込んでそのまま固まり、このような片辺礫岩として残ったと考えられます」

南片辺から少し南下した吹上海岸では、当時の激しい噴火の痕跡である球顆流紋岩（球状の石英の粒が含まれる火山岩）が荒々しい海岸線を形づくっている。これら約3000万年前にできた片辺礫岩や球顆流紋岩は非常に硬く、金の採掘が本格化した際には金鉱石を砕く石磨（注2）の素材として重用された。

断層に沿って つくられた鉱脈

「金銀鉱脈がつくられたのも、ちょうどこの時代（約2000万年前）です」と市橋さん。大陸から引き離そうと働く力によって、佐渡の岩盤には亀裂が入り、たくさんの断層ができた。そこにマグマで熱された高温・高圧の地下水（熱水）が、地中深くの岩石から溶け出した石英や金、銀などの鉱物を溶かし込んで何度も上昇し、断層の隙

間を埋めるように徐々に沈殿していった。これが金銀鉱脈である。

相川金銀山最大の鉱脈とされる青盤脈は、長さ2100m、深さ500m、幅6mにも及ぶという。

やがて日本列島が大陸から完全に切り離されると（約1700万年前）、日本海が誕生した。佐渡はその後いったん日本海の海底に沈んで姿を消してしまいが、平根崎では佐渡が海底だったことを窺わせる貝の殻、またウニが這った跡などの化石を見ることができると。

「マングロブの花粉化石もあります。当時、ここは暖流の影響で沖繩のように温暖な気候でした」

長い年月を経て、佐渡が再び姿を現すのは今から約3000万年前のこと。日本列島全体がプレートに押しされて隆起を始めると、海底にあった佐渡にも力が加わり、大佐渡、小佐渡が二つの島となって海上に顔を出した。この時、約3000万年前の大地をしっかりと抱えたまま隆起したおかげで、佐渡島には豊かな金銀鉱脈が存在するのだ。

佐渡の食を支えた 国中平野の成り立ち

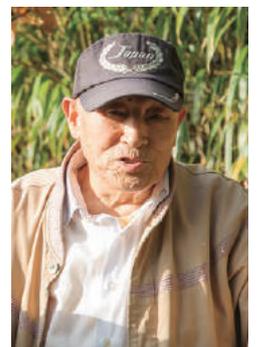
大佐渡、小佐渡の山から出る大量の土砂は、川で運ばれて海岸線

に堆積し、さらに波がその砂を動かして、今の真野湾と両津湾のあたりに砂州が形成された。

「砂州に挟まれた海が土砂で埋め立てられ、二つの島をつなぐように平野ができたのです」

国中平野が海だったことを示すのが、縄文時代の貝塚遺跡である。6000〜5000年前の縄文時代は海面が4〜5m高かったと推定し、当時の海岸線を地図上に再現すると、「堂の貝塚」など田畑のなかに無造作に点在する遺跡が、海を囲むように並ぶ。「人の営みは今も昔も大地があつてこそなのです」と市橋さんは言う。

時は下って江戸時代。金山採掘のため相川集落の人口が増えるのと米が不足し、国中平野周辺の新田



舟津江について説明する農家の加藤洋さん

開発が一気に押し進められた。国中平野には大きい川もあり水は豊富だが、広大な水田に水を平等に分けるには工夫が必要で、複雑な江（注3）が張りめぐらされた。

江戸時代から分岐する江の幅が変わっていないという「舟津江」を市橋さんと訪ね、地元の歴史にくわしい加藤洋さんとお会した。加藤さん宅の水田は代々、舟津江の水を利用して「舟津江は七つの江に分かれますが、その江の幅は各集落の田の面積に応じて決められています。元

禄（1688〜1704）初期につくられたものでしょう。3000年前の佐渡の人たちが、水争いを避けるために知恵を絞り、このしくみをつくり上げたのです」と加藤さんは語った。

佐渡は、地域の地形や成り立ちによって、水とのつきあい方もさまざまだ。

（2018年11月29〜30日取材）



舟津江から分かれる七つの江。手前から順に、相ノ山江、下江（しもえ）、寺江（てらえ）、佐々木江、林江、新田江、橋爪江。七つの江の幅は江戸時代から不変

〔注3〕江

佐渡では「江」を①水路、②水田に引き入れた水を温めるための水溜まりという二つの意味で用いるが、ここでは水路を指す。

〔注2〕石磨

相川金銀山では、上磨に球顆流紋岩が、下磨に片辺礫岩が多く用いられた。



ジオ



「排水」と「水利」から見る 佐渡金銀山——400年続いた鉾脈の残影

徳川領となった1601年(慶長6)から1989年(平成元)のおよそ400年で、金78トン、銀2,330トンを生産した佐渡。なかでも相川は幕府の奉行所が置かれるなど鉾山都市として発達し、最盛期には5万人が暮らしたといわれる。しかし、坑道が地下へ延びると湧き出す水の処理に苦しむ。そのなかから生まれた排水の技術、そして明治期以降の水を用いた金の抽出技術など、相川金銀山の「水扱い」の歴史を追った。

「水との戦い」を 今に伝える疎水道

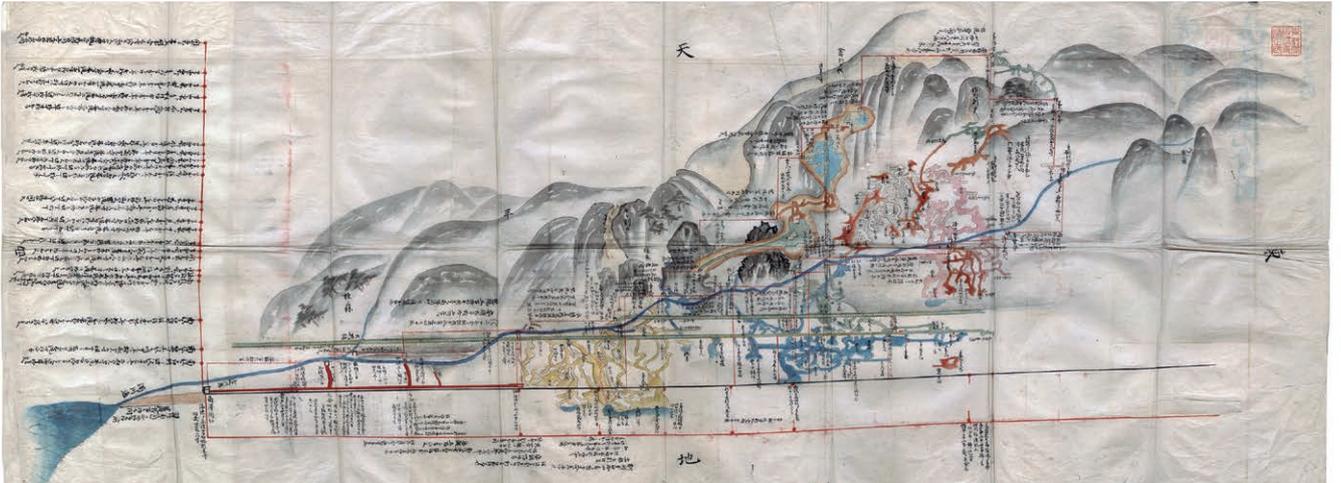
金の採掘に欠かせないのが、坑内から湧き出る水の排出。それを物語る史跡が佐渡に残されている。金山が栄えた面影を今に伝える北西部海岸沿いの相川町。そこにある「南沢疎水道」もその一つだ。

民家の脇の古びた石の階段を降りていくと、石垣に囲まれた洞窟の開口部が鉄のフェンスで施錠してあった。

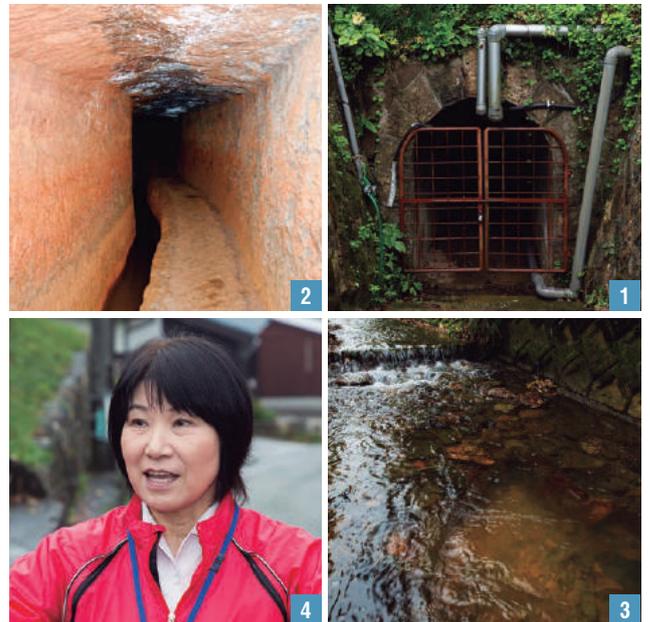
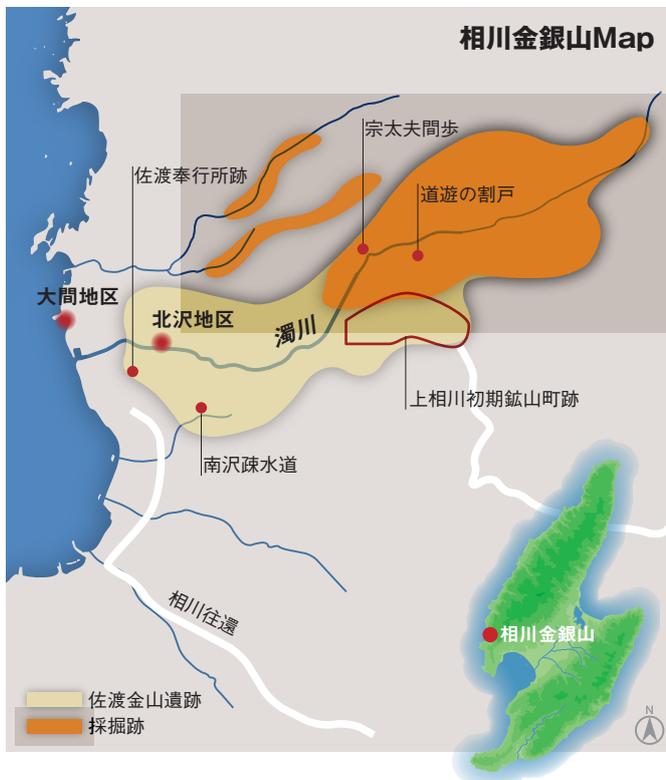
「南沢疎水道の今に残された唯一の出入口です。金山側からの出入口はふさがれて、どこにあるのかわかりません」と言いつつ案内してくれたのは、佐渡金山史跡の観光施設を運営する株式会社「ゴールデン佐渡」の職員で金銀山の歴史に詳しい石川喜美子さんだ。

山の頂上で金が発見され、金鉾脈を求め地中深くへと掘り進んでおよそ100年。坑道は海面以下にまで達した。坑内で湧く大量の地下水を排水しなければ金鉾石を採掘できない。水との戦いが過酷になり、産出量が伸び悩む。そこで1691年(元禄4)から5年の歳月をかけ、金山の割間歩(注1)から河口近くの南沢まで約1kmの

1938年建造の「北沢浮遊選鉾場跡」。浮遊選鉾は当時の最先端の技術。低品位の鉾石などに含まれるわずかな金銀を水と浮遊剤で抽出していた



1695年作成の坑内測量図を1890年に模写した『佐州相川惣銀山敷岡高下振矩絵図』。太い赤線部分が南沢疎水道。元禄期(1688-1704)の測量技術では箱根用水と並んで世界的なものと呼ばれている(株式会社ゴールデン佐渡蔵)



1 ここが現在の南沢疎水道への唯一の出入口となる 2 南沢疎水道の内部。これが完成したことでそれまで水没していた多くの坑道が復活した(提供:株式会社ゴールデン佐渡) 3 南沢疎水道は今も坑内の湧水を間切川から日本海へと流し続けている。手前の黄色がかかった部分が流出箇所 4 相川出身で一度島を出たがウターンし、佐渡の金銀山の歴史を調べている石川喜美子さん

水抜き坑道を数万の人数が開削した。これが南沢疎水道である。工事を計画したのは佐渡奉行、萩原重秀。坑道の途中、2カ所に堅穴を掘り下げ、同時に6カ所から掘削した。山側と海側から掘り進む迎え掘りの貫通点の誤差は1m足らずだったというから、高度な測量技術に驚かされる。疎水道の高さは2・4m、幅は1・8m。「なぜか断面は五角形で将棋の駒型。強度を高めるためとか、上に隙間をつくり空気の流れをよくして排水しやすくしたなど諸説ありますが真の理由は謎です」と石川さんは気になる話をした。

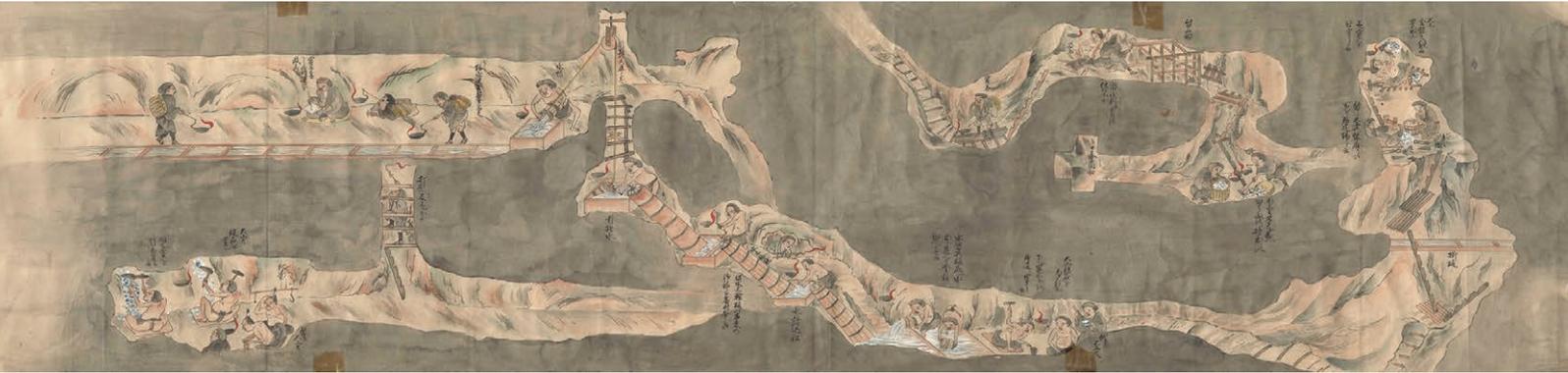
興味深いのは、300年を経て残る南沢疎水道が1989年(平成元)の閉山(正式には休山)後も管理されていること。坑内水の量や酸性度を毎月調査しているが、重金属などは含まれていない。

「30〜40年前に深刻な水不足があったとき、疎水の地下水を洗濯などに使ったと年配の方から聞いたことがあります」と石川さん。

疎水の水が湧き出しているところがあるというので石川さんに案内してもらった。住宅の裏を流れる小さな間切川の1カ所。近所の住民が顔を出し「前はもつと噴き出たのに……石が入って埋まっ

(注1) 間歩

鉱石を採掘するために掘られた坑道のこと。語源は、坑道の間を歩くからなど諸説あり。

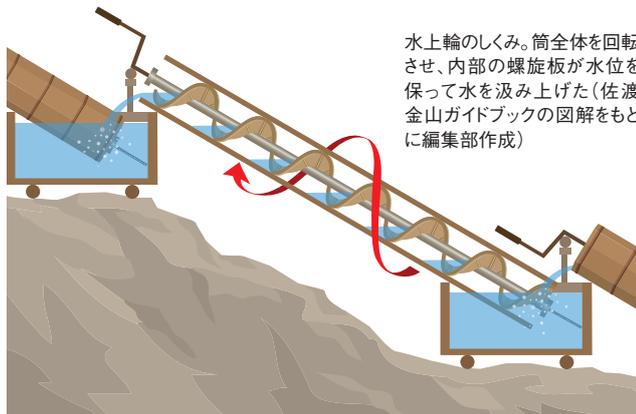


(鉾石の採掘)

(水上輪による排水)

(崩壊を防ぐ山留作業)

江戸時代後期の絵巻「佐渡の国金掘ノ巻」には水上輪による排水の作業が描かれている(相川郷土博物館蔵)



水上輪のしくみ。筒全体を回転させ、内部の螺旋板が水位を保って水を汲み上げた(佐渡金山ガイドブックの図解をもとに編集部作成)



江戸時代に使われた水上輪。昭和時代には川の水を水田に上げる際に用いられたという(佐渡博物館蔵)

水を汲み上げる 水上輪の技術

たのかな」と残念そうだった。

南沢疎水道は海面すれすれの地中に開削したが、それが完成する以前から排水は大きな課題だった。「道遊の割戸」に象徴されるように

に相川金銀山の鉾脈は標高の高いところほど豊かだったので採掘は地下へ向かわざるを得ず、水との戦いは不可避だった。水を汲み上げるための技術は、江戸初期の坑道跡を見学コースにした観光施設「宗大夫坑」に展示してある。「水上輪」と呼ばれるしくみだ。

3mほどの長さの木筒の中心軸に螺旋型の羽板が取りつけられている。この筒を坑道の傾斜に沿って設置し、中心軸を回すと、筒とともに中の羽板も回転し、下の水が螺旋に沿って上へ移動していく。江戸時代の絵図には、この水上輪を連ねて操作している様子が描かれている。それで地下深くから水を汲み上げ排水していた。

要はアルキメデスポンプ(注2)の原理。1653年(承応2)に大坂から来た水学宗甫という人物が佐渡金山に伝えた技術とされている。江戸中期から水上輪は使われな

くなった。水上輪には広いスペースと傾斜角度が必要。鉾脈が乏しくなり、排水用に掘削する手間をかける余裕はない。そうになると江戸、大坂から治安対策も兼ねて無宿人が佐渡に送られ、水替人足として働かされた。桶で水を汲み上げる人海戦術に戻ったのである。

江戸後期にはいよいよ良質の鉾石の採掘が難しくなり、それまで捨てられていた大量の低品位鉾を粉砕して金銀を取り出した。粉砕に使われたのが水車である。川の上流に池をつくって水路を引き、大きな水車の回転力を利用して心棒を回し、18本の突棒を上下に動かす圧力で鉾石を砕いた。

ちなみに石川さんから興味深い話を聞いた。この水上輪、昭和時代には川の水を水田に上げるために使っていたらしい。「80歳前後の方が、『小学生のころ学校から帰ると水上輪を回して田んぼに水を上げるのが自分の役目だった』と言っていました」。金山の排水技術が農家の水利技術となったわけだ。

鉾山都市の栄華を 偲ぶ京町通り周辺

江戸、京、大坂から多くの人と文化が流入し、金山のもたらすゴ

(注2) アルキメデスポンプ

古代ギリシャの哲学者、アルキメデスが考案したといわれる揚水装置。ハンドルを回すだけで水を上まで汲み上げられる。



鉱山都市の面影が残る京町通り。初代佐渡奉行の久保長安によって職業別の町割が行なわれた。道路に不規則な起伏があるのは、段丘を削って道を通したため

「ロードラッシュに沸いた天領のまち、相川。金山から佐渡奉行所に至る当時の繁華街、京町通りがその面影を残している。道の両側の家屋は表から見ると平家建てのようだが、裏側に回ると傾斜地を利用した地下と地上の2階建て。」

「この京町通りは山の尾根道なんですよ」と石川さんが種明かしをしてくれた。「山の斜面を段切りしています。土地が足りないほど人が押し寄せてきた証ですね」。

京町通りの坂道を下ると海が望める。「ところどころ急で、つんの

める感じがあるでしょ？尾根の段丘を削り強引に道をつけたのがわかります」と石川さん。鉱山都市のまちづくりが垣間見える。

京から来た豪商が金銀の両替店を出していた京町通りの南北には、職業別の町家が建ち並んでいた。現在も当時の町名が残っている。新五郎町、弥十郎町など人名の付いたところは、鉱山を開削した頭領である山師(注3)が住んだまち。大工町は金掘り大工。鍛冶町、大床屋町などは職人。米屋町、味噌屋町などは商店のまち。奉行所周辺の広間町は役人が住んでいた。

江戸時代を通じて一貫し遠国奉行が置かれていたのは佐渡だけ。しかも奉行所のなかに今でいう造幣局があり、小判を製造していた時期も長い。佐渡鉱山は徳川幕府の長期安定の財政基盤だった。佐渡の金銀は相川から南端の小木港を通じて舟で出雲崎に渡り、北国街道を経て中山道から江戸へと陸路で運ばれた。

明治に入っても佐渡鉱山は官営として技術開発を重ね国内トップの金銀生産量を上げたが、1896年(明治29)、財政負担の軽減と産業振興を狙い、民間へと払い下げられる。入札の結果、三菱合資会社が落札した。

京町通りには、隣家と壁を共有する三軒長屋風の木造家屋が残っている。「かつては社宅でした」と石川さんが教えてくれた。

水中で金を抽出した 北沢浮遊選鉱場

相川北沢町には巨大な威容の「北沢浮遊選鉱場跡」(以下、選鉱場)が残されている。1938年(昭和13)に金の増産を目的として建造されたこの施設では、粉碎して磨り潰した金鉱石から水を利用して金を抽出する浮遊選鉱という新

しい方法が開発された。「ちょうど鍋のアクをとるよう」と石川さんがわかりやすくたとえてくれる。「水槽のなかに磨り潰した金鉱石と、金を集める油脂性の薬品と、泡が出るように石鹼を入れます。水槽に空気を送ると、重くて沈んだ金が泡にくっついて浮かび上がる仕掛けです」

これによって、低品位の鉱石に含まれるわずかな金銀も無駄にせず抽出できた。この時代になると、山から採掘される金だけでは月間5万トンの処理能力がある選鉱場がフル稼働しない。そこで、低品位の鉱石なので江戸時代から捨て置かれ、やがて川から海に流され、波によって海岸に戻された浜石に目をつけた。トンネルを掘りトロッコで選鉱場まで運んだ。

また、処理したあとの鉱物を含んだ泥水も濃縮して水を分離し、浮遊選鉱に再利用した。そのため施設が「シツクナー」で、直径50mの大きな1基が現存している。(P14・写真7)

浮遊選鉱に使われた水は金銀山の沢から水路で引くだけでは足りず、坑内に湧き出た水も使った。明治後期には火力発電所(北沢浮遊選鉱場に現存)が建設されたので、冷却水に海水も利用されたという。

(注3)山師

15世紀末から16世紀に現れ、江戸時代に広く存在した鉱山業者のこと。金山師の略称。江戸中期以降は鉱山の全経営を請け負う者も多かった。転じて投機家や詐欺師を指す言葉としても使われるようになる。



5



6

5 コンクリートが普及する前の「たたき工法」によって築かれた大間港。鉱石の搬出や石炭などの資材搬入に使われた。石積み部分の部分がたたき工法で、それ以外のはちに拡張・補強されたコンクリート部分 6 大間港に残るラス橋。こうした朽ちていく遺産の保存は大きな課題といえる 7 選鉱を経て泥状になった鉱物と水を分離する沈殿槽「北沢50mシクナー」。ここで分離した水は工業用水として再利用された。さまざまなシクナーがあったが、現存するのはこの1基のみ

ところで、段丘の地形を利用した選鉱場は、上から下に向かって破碎↓磨鉱↓粉砕↓浮選↓濃縮の工程順に傾斜した内部施設が剥き出しになって残っている。屋根はどうなったのか。その疑問を石川さんが解き明かしてくれた。

「昭和18年に経済封鎖を受けると金銀を使う貿易はできません。それで政府は金銀山をつぶし、武器や鉄砲の弾に使える銅、鉄、亜鉛を採掘する鉱山に転用します。選鉱場の屋根も剥がされて政府に供出されたのです」

金銀しか採れなければ佐渡鉱山は閉山になっていたかもしれない。だが幸い銅鉱脈もあったので生き

延び、戦後再び金銀山に戻れた。

鉱山には足を向けて寝られない

相川には江戸時代から番所があり、主に米が陸揚げされていた大間港がある。だが本格的に築港されたのは1887年（明治20）から。北沢地区に選鉱所を開発する際に削りとった土砂で埋め立てたが、強い季節風と高波のため工事は難航し、5年の歳月を要した。まだコンクリートのないこの時代、護岸には土木技術者・服部長七の考案、指導による「たたき工法」が採用された。消石灰と土砂を混ぜ

た種土に水を入れて練った「たたき」と石積みを組み合わせた護岸技術である。

この護岸とともに今も大間港に一部の姿を残しているのは、クレインの台座と橋脚。選鉱場が稼働していた昭和の大増産の時代には、海へ張り出すように橋が設置され、貨物を運ぶクレーンやトロッコが通った。金鉱石はここから船に積み出され、香川県直島の三菱の精錬所に運ばれた。また、大間港には火力発電所が建設され、燃料となる石炭が積み入れられた。

江戸時代に開削された南沢疎水道や水上輪の技術は排水のため、そして明治から昭和前期に築造された大間港や北沢浮遊選鉱場は水利として——佐渡鉱山の長い歴史に「水」は浅からぬ因縁があった。

「鉱山の排水技術が、田んぼに水を引いたり、隧道を掘ったりする技術にも影響していると思います。岩をくり抜いた冷たい「室」を冷蔵庫がわりに種芋や粉殻を保管していたのも、鉱山の採掘技術からきているはず」と話す石川さんは、ある家庭に聞きとり調査に行ったとき、こんな言葉を聞いた。

「お父さんが鉱山で働いてくれたから、私たちは満足な暮らしができた。鉱山に足を向けては寝られない」

佐渡の生活と産業は400年続いた金銀の鉱脈抜きに語れない。

（2018年11月12日取材）



7



【鉱山】



佐渡最初の鉱山を 繁栄させた「水」



笹川集落の水田(開田地区)を潤すU字溝の水路にかつての水路跡(白線部分)が並走する。山師たちの掘削や測量の技術が活かされた水利だ



(右) 笹川集落の上に広がる「開田地区」の水田。山向こうから引いた水を利用している
(左) 中世から江戸時代にかけて砂金採取の中心地として栄えた笹川集落。右手奥に見えるのは改修中の金子勘三郎家



金の産出にはいくつかの方法がある。主要な金銀山の一つ、西三川砂金山では、水路を通して水を堤に溜めておき、一気に流し込んで余分な土石を洗い流す巧みな水利用があった。その名残は1872年(明治5)の開山後に農山村へと転換した「笹川集落」に見ることができる。国の重要な文化的景観にも指定されている山間の集落を訪ねた。



砂金の産出量を 増やした水利技術

坂道を上ると、水田が広がる平坦な土地に出た。車から降りて、田に水を引くU字溝の水路をたどれば、人ひとりが通れるほどの山道に沿って森のなかへ。山肌を覆う草木の左上の方に、わずかに窪んだところがあり、その窪みはU字溝と並行して続いている。

「これは砂金採りに使われていた旧水路の痕跡です。明治5年の開山後も、山の堤から同じ経路をたどって農業用水路に転用されました」

「笹川の景観を守る会」の会長、金子一雄さんが説明してくれた。

佐渡南西部を流れる西三川川の上流にある笹川集落。ここは中世から江戸時代にかけて、佐渡の砂金採取の中心地として栄えたところだ。

特に戦国末期から江戸初期にかけて産出量が伸びた背景には「大流」と呼ばれた水利技術の導入がある。それ以前は川底を掘り返した土砂から砂金を選び分ける原始的な方法だったが、山裾の地表を人力で大規模に掘り崩し、砂金を含んだ土砂を谷川に滑らせる。そ



笹川集落の中心部に残る石積み水路跡。こうした水路や堤の跡は今も多数残っている



西三川砂金山で最大の稼ぎ場とされる虎丸山(とらまるやま)。砂金を含む山肌を掘り崩した跡が見える

水の力を利用した砂金採取法(笹川集落内の砂金採掘場「中柄山稼所」)



堤に溜めておいた水を一気に流して不要な土砂を洗い流す「大流」。砂金が効率よく採取できる



砂金の含まれる地層を金穿(かなほ)りたちが掘り崩す

絵図『佐州金銀山之図』より「西三川砂金山稼方図」(新潟県立歴史博物館蔵)

平安時代から鎌倉時代にかけての『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』に、能登国(石川県)の鉄掘り集団の長が佐渡国で金を採取する説話があり、その舞台が西三川流域とされている。そうならば、ここが佐渡の金採取のルーツだ。

閉山後の集落を
農村に変えた水

「大半の水路跡は草木に覆われましたが、子どものころはまだ原型が残っていて、よく遊び場にしたものです」と懐かしむのは「笹川の景観を守る会」の吉倉和雄さん。西三川砂金山の隆盛は「水」なくしてあり得なかったのである。

一つの稼ぎ場から砂金18枚(180両、約2・9kg)を毎月上納した笹川集落は「笹川十八枚村」と呼ばれた。江戸期以降の砂金山の隆盛は、佐渡奉行所から派遣された金山役の役所および屋敷跡とされる平坦面と石垣、そして名主を務めた金子勘三郎家の茅葺屋根の佇まいなどに残されている。

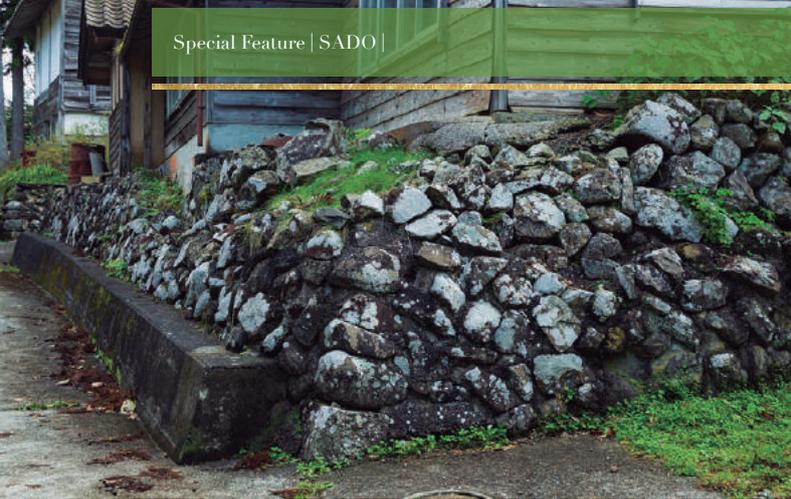
1872年(明治5)の閉山後も

して長距離の水路を引き、大量の水を堤に溜め込んでから、水を一気に抜いて余分な土砂を洗い流す。そして残った砂礫から大小の石を取り除いて砂金を採取するという方法である。

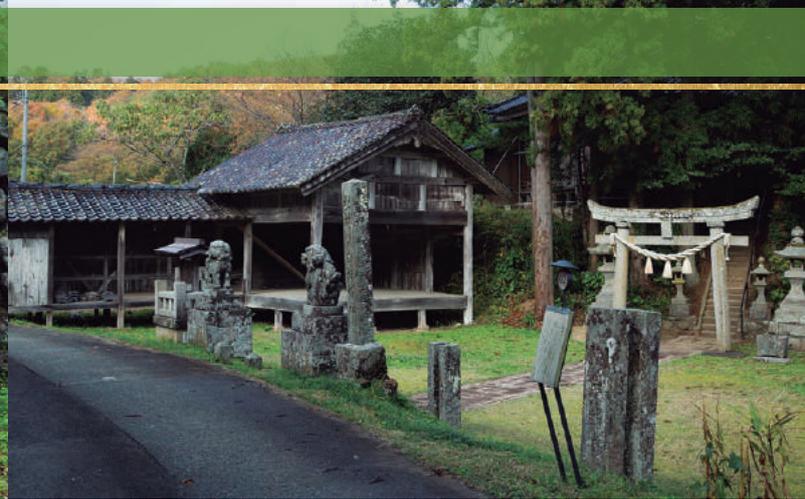
水路跡は集落の中心部にもある。今は道路で寸断された断面を見ると、石垣の上面に平らな石を並べ、底面に水漏れ防止の粘土を貼った幅約1・5mの石積み水路の痕跡だとわかる。山を掘り崩して出た大量のガラ石を利用し、こうした水路が網の目のようにつくられていた。

笹川集落の荒神山は中世に山伏が修行したと伝わる岩山。砂金山の発見と開発には山伏が深くかわつたらしい。なるほど山伏なら野山に分け入るのはお手のもの。水神を祀る諏訪神社の跡地に松浪遊仁なる人物を紹介した立札がある。1555年(弘治元)から3年間、砂金採りをして、水神様よりも稼ぎ優先とばかりに、採取に邪魔な神社を別の地に移したそうだ。

1589年(天正17)、佐渡を平定した上杉景勝は砂金を豊臣秀吉に上納。大規模な開発が始まり、砂金稼ぎのため全国から多くの人々が笹川集落にやってきた。大山祇神社は鉾山の安全と繁栄を祈願して1593年(文禄2)に建てられたもの。今も4月15日の例祭では「朝から晩まで集落の1軒1軒を回りながら酒盛りをする」ならわしと金子さんは言う。



集落を歩くと、砂金採掘によるガラ石を用いた敷地境界や道路法面が目にとまる



1593年(文祿2)に建てられた大山祇神社と19世紀後半の建造とされる能舞台



「笹川の景観を守る会」の会長を務める金子一雄さん(右)、副会長の盛山保さん(中)、吉倉和雄さん(左)

砂金山の記憶が 埋め込まれた景観

大半の住民は離散せず炭焼きなどで生計を立てた。やがて砂金採掘の跡地や堤を田畑に替え、採掘用の水路を耕作用の水路に転じて、鉾山技術を活かした農地開発が進み、明治末期には農村へと姿を変えた。やはり「水」が集落を存続させる命綱となったのである。

ちなみに今も、集落を流れる笹川で佐渡の小学生が親子で砂金採りのイベントに興じている。

「佐渡西三川の砂金山由来の農山

村景観」は、全国で63件(2018年10月時点)しかない国の重要文化的景観の一つに選定されている。

砂金採掘のため一つの山を大規模に掘削し、急斜面の孤立した山々になった景観。大山祇神社や阿弥陀堂などの信仰施設。砂金採掘で堆積したガラ石を利用した敷地境界や道路法面の石垣。鉾山技術を淵源とし農業に転用された水路や堤。江戸時代の絵図と大差なく集落内に継承されている、こうした重層的な価値が貴重とされた。

しかし、重要な文化的景観に選定されると景観を損なわない土地利用が求められ、家屋の改修も認可が必要。なかでも道路の延長・拡張計画が凍結される点が論議的になり、集落で合意に達するのに3年かかった。

29軒、100人弱の笹川集落全員で構成される「笹川の景観を守る会」は、重要な文化的景観に選定された2011年(平成23)の前年に発足した。副会長の盛山保さんは、「昔は砂金が採れたらしいと知ってはいても、自分たちの住んでいるところにそんな価値があるとは思いませんでした」と振り返る。そして「自分たちの住んでいる地域を自分たちで守る意識が生まれたし、地域の歴史をよく

知るきっかけにもなって、結果的によかったですと思います」とも言う。

7〜8年前から始まった行事が秋の収穫感謝祭と冬の笹話会。笹話会では飾り寿司や「おこしがた」と呼ばれる菓子、清冽な水が恵む手づくり豆腐など、昔ながらの郷土食を復活させている。「笹川の景観を守る会」の発足と重要な文化的景観の認定は、コミュニティの活性化にもつながっているようだ。

しかも、見学や視察に来訪する人を会のメンバー、すなわち住民たちが案内している。

「地域の保全が目的なので観光客を誘致しようとは考えていません。生活の場を勝手に回られるのは困るから保全費用の足しになる程度の料金でガイドしましょう、というくらいのスタンスです」と会長の金子さんは今後について話す。

水を軸に鉾山から農村に転じ存続した笹川。砂金山由来の農山村景観は今また、住民たちの手によって未来へと引き継がれてゆく。

(2018年11月11日取材)



景観と調和するように設計されたサインシステム。集落内に12カ所設置されている





江戸期の記憶留める棚田

江戸時代初期、金銀山の発見で人口が急増すると米が足りず、島外からも運んでいた佐渡。山間に広がる美しい棚田の多くは、この時期に拓かれたとされる。急斜面に天水（雨の水）を巧みに巡らせる工夫を「岩首昇竜棚田」で見た。

竜が昇るように拓かれた棚田

落葉広葉樹の森の間を縫うように、小ささまざまな形をした水田が連なっている。下から見上げると、まるで天に向かって竜が昇っているかのよう——。ここ「岩首昇竜棚田」は、小佐渡山地の東側の海沿いの集落・岩首にある。江戸時代初期から一度も途絶えることなく稲作を続けている。

「慶長年間（1596-1615）の検地帳によると、この集落は22軒から始まったそうです」と言うのは、廃校を活用した交流拠点「岩首談義所」の代表で、佐渡棚田協議会の会長も務める大石惣一郎さんだ。岩首集落は56戸、126人が暮

らす。12〜13haほどの棚田は海拔30mから470mと標高差が大きく、佐渡でもっとも急勾配といわれる。上から眺めると棚田の向こうに青い海が広がっている。

「昇竜と言ったのは最近ここに遊びに来た学生なんだ。それで『岩首昇竜棚田』と呼ぶように。私にはどうってことない景色だけどね」大石さんはそうそうぶいた。

集落の総意で植えなかつた杉

岩首にはダムも溜池もない。森が蓄え、山からしみ出てくる沢の水だけで米を育てている。

「上の田んぼに水を入れて、そこから下の田んぼに落とす『田越し』です。昭和50年代に基盤整備をする前はすべてそのやり方でした」今も部分部分で田越しは残る。しみ出る水は冷たいので、じかに田へは入れない。「江」を通った水を「そ江」（注）で巡らせ温めてから入れる。大石さんは「水を融通し合う田越しは人間関係を密にす

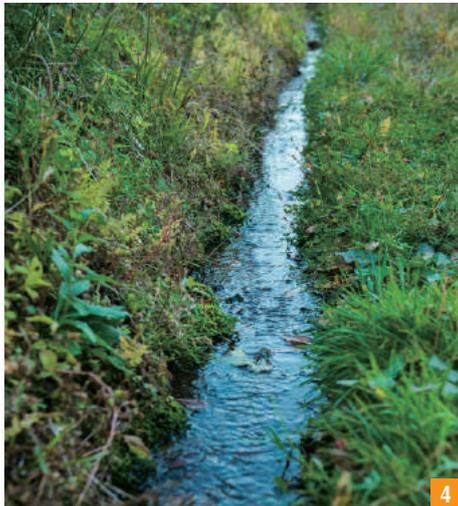


岩首昇竜棚田を案内してくれた大石惣一郎さん。言葉の端々にこの土地への愛着が感じられる

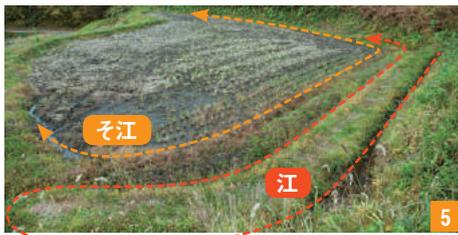
上から見た岩首昇竜棚田。棚田の向こうには海が広がり、天候がよければ新潟県の弥彦山や飯豊連峰も一望できる



1



4



5

1 落葉広葉樹の蓄えた水がほとぼしるように流れる岩首の沢 2 「十杯田んぼ」を案内する大石さん。その名の通り、ごくわずかな量の米しかとれなくても大事に使われてきた古い田 3 岩首集落には明治末期まで採掘されていた小規模な金山があった。川沿いの崖にぼっかりと空いた坑道がその名残 4 冷たい山の水が流れる「江」 5 「江」を経た水は「そ江」で温めて田に入れる



2



3

るものでした」と言う。

昔も今も岩首の棚田の水を支えているのは落葉広葉樹の森。地名からわかるようにもともと岩だらけの土地に広葉樹の葉が降り積もり、そこに木が生えている。杉など針葉樹はほとんど目につかない。「岩首では米のほかに木炭と竹が収入源でした。戦後、杉の植林が推奨されましたが、杉から木炭はつくれない。集落で話し合って杉を植えるのはやめたのです」

その英断が江戸時代からの棚田

中心の暮らしを維持させた。

「でも、8月になるとカラッカラに乾くこともあってね。そのときは雨が降るのを願うだけです」

ゆがんだ田に残る 先人たちの心

見事な棚田の風景と暮らしに惹かれて、岩首を繰り返し訪ねる人たちもいる。首都圏の大学生たちも毎年400人ほどやってくる。十数年前、大石さんが一人で始め

た棚田散策ツアーがきっかけだ。

「最初は『こんな田舎に人が来るわけがない!』と変人扱いされましたね。でも昔の人がつくった棚田を見て、その価値をわかってくれる人がいるかもしれないじゃないか、と考えたのです」

大石さん自身、「こんな暮らしは嫌だ」と島を飛び出し、15年ほど東京で暮らしていたことがある。「朝から晩まで働く母は『お金がない!』と嘆いていました。ここは、ホントは人が住むところじゃない

んだよ!」と大石さんは笑うが、それが本心であるはずがない。

岩首には江戸時代のままの形の田がまだ残っている。その一つ、「十杯田んぼ」を見た。ゆがんだ形をした、小さな小さな田んぼだ。

「わずかな土地でも大事に、一粒でも多く米をとろうとした先人の心が残っているようだね」と大石さん。鉱山の水利技術とのつながりは証拠がなく判然としないものの、古の工夫は今も生きている。

(2018年11月15日取材)



【棚田】

(注)そ江 田んぼのなかにまるで寄り添うようにあるため、漢字をあてるとすれば「添江」だが定かではない。

金銀山を支えた 鉱山水利と食糧増産

佐渡市世界遺産推進課 係長 宇佐美 亮さん



佐渡島の特異な点は、旧小町以外のすべての市町村で、金、銀、銅、鉛、砂鉄などの鉱物がとれたことです。400年近い鉱山の歴史があるため、採鉱、製錬、排水の新技术が次々に入ってきました。

排水は、当初は釣瓶(つるべ)を用いました。その後、スポイトの原理を用いた「寸法樋」が導入されますが佐渡には合わず、「水上輪」が登場します。水上輪は100年ほど使われますが、その後、水田にも

転用されます。鉱山上で水上輪が使われなくなると仕事が減った職人たちが農業用につくりさらに普及したとも言われています。水上輪は国中平野を流れる国府川でも多く用いられました。以前は納屋の軒先に吊るされた古い水上輪を見かけましたし、平成10年ごろまでは水上輪をつくっていた職人もいました。

一方、江戸時代初期に人口が増えたので、食糧の増産が課題でした。大久保長安は石見国から3人の漁師を呼び寄せて鑑札を与え、彼らがどの浦でも漁することを許します。漁師たちが移り住んだ漁村「姫津」は今でも石見姓の方がたくさん住んでいます。もちろん米も重要ですので、新田開発が行なわれました。

海沿いの段丘上につくられた小川の水田。圃場整備を終え、方形の田となった





海を越え、育まれた芸能

「芸能の宝庫」といわれるほど多くの民俗芸能が伝承されている佐渡。流罪によって流された貴族や知識人たちが伝えた「貴族文化」、鉾山の発展で奉行や役人たちが江戸から持ち込んだ「武家文化」、北前船で商人や船乗りたちが運んできた「町人文化」。海を渡って伝統芸能の概略を紹介する。

島外の文化を受け入れた島

ハー 佐渡へ 佐渡へと
草木もなびくよ

佐渡を代表する民謡として全国に知られる「佐渡おけさ」。実は元々佐渡で生まれたものではなく、はるか熊本本の港唄「はんや節（ハイヤ節）」がそのルーツとされる。

「北前船によって九州から佐渡にもたらされた『はんや節』が、小木の港町から、やがて相川の金銀山まで伝わり、『選鉾場おけさ』として唄い継がれるようになったと

言われています。佐渡の芸能は、このように海を渡ってきたさまざまな文化を取り入れ、影響を受けながら、独自の発展をしてきたものが多いのです」

そう語るのは、自身も地元の「鬼太鼓」で鬼の舞い手を演じているという、佐渡市教育委員会の野口敏樹さんだ。

佐渡には、「貴族文化」「武家文化」「町人文化」という三つの文化の影響が色濃く残っている。中世には、佐渡は流刑地とされ、順徳上皇や日蓮上人、世阿弥^{ぜあみ}など、時の政争に敗れた貴族や文化人が流人として渡ってきた。彼らもたらしたのが上方の貴族文化だ。

江戸時代に入ると、今度は金山開発のため幕府の統治下におかれ、武家文化が広まった。さらに、西廻り航路が確立されて北前船の寄港地になると、商人や船乗りが全国の町人文化を佐渡に運んできた。

離島であるがゆえ、一度入って来た文化は外に出ることなく蓄積され、その結果、歌舞伎や人形芝居といった娯楽から民謡、能楽、

神事祭礼まで、まるで日本の縮図のように多彩な芸能が、佐渡の各地に根づいていったのである。

集落ごとに異なる「鬼太鼓」の多様性

佐渡の芸能としてまず挙げられるのが能楽だろう。最盛期には200近い能舞台が建てられ、現在も35が残っている。能の大成者、



1



5



4



3



2

1 島内に35ある能舞台の一つ「大膳神社能舞台」。1846年(弘化3)に再建されたもの
2 佐渡市教育委員会の野口敏樹さん。現在は西・北教育事務所長 3 毎年6月、牛尾神社で行なわれる例祭宵宮薪能 4 熊本の港唄「はんや節」がルーツとされる「佐渡おけさ」(3、4提供:野口敏樹さん) 5 18世紀後半に記された「佐渡年中行事図」には相川の祭りとして鬼太鼓の様子が描かれている(舟崎文庫蔵)

世阿弥が流島されて広められたと思われがちだが、実は江戸時代初頭、初代佐渡奉行として派遣された大久保長安が、武家の教養のために能楽を持ち込み、庶民まで広く能を開放したことが大きいらしい。

佐渡は稲作が盛んなため、五穀豊穰を祈る祭儀礼も多い。初春には、田植えを模した儀式で豊作を祈願する「田遊び」、「御田植」といった神事がいくつかの神社で行なわれる。また、天文年間（1532-1555）から続くとされる城腰の「花笠踊」は京風の雅な舞いだが、かつて新田開発の際にご神託により水田に水が出たことへの感謝として、久知八幡宮例大祭（9月に奉納される。同じような花笠踊は、山を越えた赤玉集落や、島の北側の相川地区の北田野浦集落などにも伝わる）。

そして、佐渡の人々にもっとも親しまれている伝統芸能が「鬼太鼓」だ。「おんでこ」とも呼ばれる古くから伝わる芸能で、悪魔を払い豊年を祈る神事である。

野口さんは「佐渡には約260の集落がありますが、そのうち120近くの地域の祭りに、鬼太鼓が登場します」と語る。

野口さんによると、佐渡の鬼太鼓は三つの系統に分類される。

一つは、国中平野から両津湾沿岸に広がる「国中系」で、能楽を思わせる洗練された太鼓と鬼の舞いが特徴だ。野口さんの両津湊地区を含め、佐渡の鬼太鼓の約7割はこの国中系だ。

二つめは、相川地区を中心とした「相川系」。豆まき系とも呼ばれ、鬼が舞う代わりに烏帽子をかぶった翁が豆まき風に踊る。かつて相川金銀山の鉱夫が鑿（たがね）を手に持って舞ったものが始まりともいわれている。

三つめが、新潟側の海沿いに見られる「前浜系」で、2匹の鬼が対になり、太鼓と笛に合わせて向き合って踊るのが特徴だ。

「実際には、鬼の顔も舞い方も集落ごとに個性があつて、一つとして同じ鬼太鼓はありません。それぞれ『自分の地区の鬼太鼓が一番』と思っっていますよ」と野口さんは言う。

次世代につなぐ 佐渡の伝統芸能

多彩な芸能が今も息づく佐渡だが、高齢化による芸能の担い手不足は深刻だ。羽黒神社の「やぶさめ」のように、伝統がありながら十分な人数が集まらず休止を余儀

なくされている行事も多い。野口さんの地元湊町も、40年ほど前に一度大きな転換期を迎えたという。「かつては町内が組で分かれ、鬼太鼓や神輿、山車などを各組が専ら継承していました。しかし、それではもう祭りが成り立たなくなってきた。そこで30代、40代の青年らが立ちあがって『若松会』を結成し、組に関係なく子どもたちを集めて鬼太鼓などの芸を地域全体として伝承することにしたのです。当時小学生だった私は、その初期のメンバーです」

一方、島外から佐渡の伝統芸能を支援しようとする動きも少しずつ出てきている。例えば、新潟大学の学生が鬼太鼓を習い覚えた縁で、卒業した後も地域の祭りに参加するなど、関係人口（注）も増えつつある。

そして今、地域全体で力を入れているのが、毎年5月末に開催される「佐渡國鬼太鼓どっこい」という芸能祭だ。鬼太鼓をはじめ島内のさまざまな伝統芸能が集結する一大イベントで、年々人気が高まっている。

伝統を守るのはたやすいことではないが、佐渡の人たちは次世代へつなぐために手を尽くす。

（2018年11月30日取材）

「鬼太鼓」の三系統（提供：野口敏樹さん）



2匹の鬼が対になり、太鼓と笛に合わせて踊る「前浜系」



鬼が舞う代わりに烏帽子をかぶった翁（おきな）が豆まき風に踊る「相川系」



能楽を思わせる洗練された太鼓と鬼の舞いが特徴の「国中系」

（注）関係人口

移住した「定住人口」でもなく、観光目的で訪れた「交流人口」でもなく、地域や住民と多様にかかわる人々のことを指す。



【伝統芸能】



廻船の歴史伝える

濃密な空間

歴史を物語る 大量の陶磁器

「なぜ、こんなに?」。そう思った。
伊万里焼(佐賀)のかさね重と陶
枕、信楽焼(滋賀)の茶壺、備前焼
(岡山)の船徳利、小石原焼(福岡)
の壺、唐津(佐賀)のすり鉢、尾道
(広島)の酢徳利のほか、九谷焼(石
川)など各地の陶磁器が所狭しと
並ぶ。これらはすべて北前船(注1)
で佐渡にもたらされたものだ。

旧・宿根木小学校の木造校舎を
利用した佐渡国小木民俗博物館に
は、かつて民俗学者の宮本常一が
住民に呼びかけて集めたという、
海運の歴史を物語る貴重な品々が
収められている。1858年(安
政5)に宿根木で建造された北前
船を当時の設計図をもとに復元し

佐渡の南端に位置する宿根木は、近世初期から明治時代
にかけて北前船の交易で栄えた集落だ。わずか1haほどの
小さな土地に路地が迷路のように巡り、今でも100棟を
超える板壁の民家が密集している。船大工の技が随所に活
かされたまちなみが国の重要伝統的建造物群保存地区にも
選定されている。宿根木に残る歴史と栄華の跡をたどった。

た「白山丸」も展示されている
(P.25の地図参照)

「宿根木の人たちは、鎌倉時代から小さな船で海運業を営んでいました。今の直江津、能登、鶴岡あたりと取引していたのです」

そう語るのは、佐渡博物館の前

館長で、今は宿根木地区歴史的景観審議会の修復部会長を務めている郷土史家の高藤一郎平さん。宿根木小学校は母校であり、宮本常一の薫陶を受けた一人でもある。

佐渡島南端の小さな港で細々と暮らしていた宿根木が発展しはじめたのは相川金銀山と関係がある。「金銀山が発見されると、それまで佐渡に住んでいた人以外に4万人が来たと言われています。その人たちの食べる米だけで6万石が必要でしたが、当時の佐渡の年貢米はたったの2万石。まったく足りません。そこで越後(新潟)から大量の米を運んでいたので」

さらに1614年(慶長19)、宿根木から4kmほど離れた小木が幕府の公式な港「公津」に指定されると、宿根木の人たちはその整備に力を尽くす。その証拠が小木の築港に用いられた大きな石。これは小木半島の先端にある沢崎さわさきでしか採れないものだが、同じ石が宿根木の集落でも使われている。



1

1 1858年に宿根木で建造された「幸栄丸」を設計図通りに実寸大で復元した「白山丸」。全長23.75m、最大幅7.24m、艀(とも)高6.61m、積石数512石積(約77トン積) 2 佐賀県有田地方でつくられた伊万里焼の壺。伊万里港から積み出されたものが北前船による交易で佐渡に渡った 3 広島県尾道から運ばれた酢徳利(すどっくり)



2



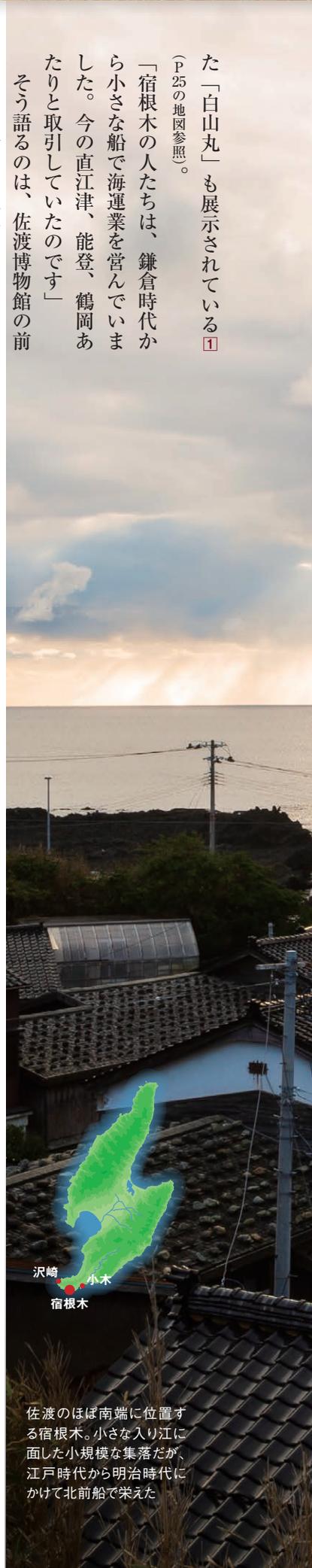
宿根木を案内してくれた高藤一郎平さん。佐渡の歴史と文化に精通している



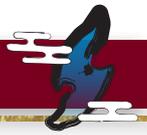
3

(注1)北前船

江戸中期から明治の初めにかけて北海道と大坂を結んで西廻り航路を往来した廻船。千石(せんごく)船、弁舟(べんざい・べざい)船、どんぐり船とも呼ばれた。



佐渡のほぼ南端に位置する宿根木。小さな入り江に面した小規模な集落だが、江戸時代から明治時代にかけて北前船で栄えた



現在の小木港。停泊中の風よけとなる小高い山(城山[しろやま])があり、港に適した地形

「沢崎の石は一軒の家の下から70個以上出てきたこともあり、宿根木の地盤を整えるために使われています。宿根木周辺では硬い石が採れなかったため、佐渡奉行の小木湊整備工事で沢崎から小木へ運ぶ一方、自分たちの集落にも石を持ち込み、川筋の固定などに用いたようです」と高藤さんは言う。

情報を共有した船主たちの結束

小木が金銀を運ぶ「奉行船」の港となったことで宿根木は活気づく。小木は新興の地でまちの機能に乏しく、宿根木の舟宿に多くの人が泊まった。また、河村瑞賢によって西廻り航路が整備され、1672年(寛文12)に小木港が寄港地になったのも追い風だった。

「その少し前(1657年)に江戸で『明暦の大火』がありましたね。一面の焼け野原から幕府が復興を目指したので大変な数の人が集まり、そのまま留まったので江戸はどんどん大きくなった。そこで幕府は米どころ東北の天領から米を集めるために酒田(山形)を起点にしますが、酒田から南へ向かう最初の寄港地が小木でした」

小木が商業の地として栄え、隣地である宿根木もまた栄える。お互いが支え合う関係にあった。

宿根木の人たちは、次第に船で各地に乗り出していく。それを支える船大工など船にかかわる技術者が住むようになり、宿根木そのものが北前船の産業基地のようになっていった。ただし、江戸初期は宿根木では船をつくっていなかったと高藤さんは指摘する。

「よそから中古の船を買ってきて、それを少し小さくつくり替えて使っていたようです」

宿根木初の新造船は1776年(安永3)。宿根木の船主の一人、高津勘四郎の白山丸だった。7年後の1783年(天明3)、宿根木の廻船が松前からニシンやカズノコ、昆布などを買い求め、酒田や秋田、三国、敦賀、新潟、下関でそれらを買った記録が残っている。

「北前船の多くは船賃で稼ぐのではなく買い積み方式といい、ある地域で仕入れたものを別の地域で売って、その価格差で稼いでいました。仮に100円で仕入れた塩を150円で売るか180円で売るかの判断は難しい。そこで宿根木の船主たちは行く先々の宿をあらかじめ決めておき、そこに自分が得た情報を置いていきます。次にその宿に来た船主は相場を知り、儲けられる売値を決めることができました。暗号のようなものも使われたかもしれません」

高藤さんによると、他にも多少仲間はいたようだが基本的には宿根木の船主12、13人だけで情報をやりとりしていたという。集落の仲間同士、結束は深かった。

飛ぶように売れた佐渡の蕨製品

実は、食料をはじめ材木や漁獲物などすべての産品は江戸中期まで島外へ持ち出すことを禁じられていた。解禁されたのは宝暦年間(1751-1764)に入ってからだ。

「金銀の産出が不調になり、しかも米の不作が続いたことから島内で一揆が頻発しました。農民の救済措置として『島内のものを売っ

てもよい』となったのです」

ここから佐渡の産品が他の地域、特に開拓期の北海道へ運ばれる。

「北海道ではとにかくなんでも売れたそうです。ニシン漁の網は蕨で編むものですが北海道では米はつくれぬ。佐渡の縄や苅、草履などの蕨製品が飛ぶように売れました。あとは米や竹などもです」

宿根木がもつとも栄えたのは、持ち出し解禁となった江戸中期以降。宿根木に人が集まり、入り江に面した集落に入りきれず、裏の高台に家を建てる者が続出した。

集落に今なお残る船大工と廻船の痕跡

実際に高藤さんと宿根木を歩いてみる。アニメ映画に出てくるような笹藪のトンネルを抜けると集



4 葬儀の際に必ず通ったとされる「世捨小路(よすてこうじ)」。不思議な名前だが由来は定かではない 5 集落のなかを流れる称光寺川。左岸と右岸で地面の高さが違うのは宅地造成の年代の差。左岸が古く、右岸はやや新しい



宿根木公会堂

さまざまな行事に使われる芝居小屋形式の施設。集落の拠点であり、観光交流の場でもある

念佛橋 ねんぶつばし

三角家 さんかくや

伊三郎 いさぶろう

船頭を稼業としていた家柄の主屋。「石」と書かれた軒下飾りなど特徴的な意匠が残る

清九郎 せいくろう

北前船を2艘所有した船主の邸宅。水害後の1858年ごろに建てられた。内部は漆塗りなど豪華なつくり

佐渡国小木民俗博物館 1 2 3

称光寺

1349年(貞和5)開創と伝わる時宗の古刹。宿根木は一村全戸が称光寺の檀家

笏谷石 しゃくだにいし

九頭竜川沿いで採れる石。三国湊(福井)から運び、敷き詰めた道も残っている



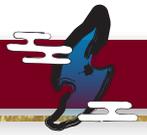
佐渡宿根木プロジェクトの探訪マップをもとに編集部作成。右下の地図は国土地理院基盤地図情報「新潟」より編集部で作図

落が一望できる高台だった。石置木羽葺屋根、石州瓦を用いた茶色い屋根、能登瓦(のち三州瓦)の黒い屋根の家々が入り混じるノスタルジックな風景が広がる。小さな入り江に面した集落の真ん中には称光寺川が流れている。高藤さんいわく、この川筋は人為的なもの。「海と山が混ざり合ったような荒れた土地でね。それを自分たちで川筋を決め、道割をし、その間にできた土地に家を建てた。だから正方形の宅地は少ないのです」

その代表格が「三角家」⑥。敷地に合わせて三角形に切り詰めて建てられている。「ここはかつて川の中州だったでしょう。尖った部分が中州の先端かな」と高藤さん。上流側から見ると、なんとなく船の舳先を思わせる。それもそのはず。この家は船大工の技術が応用されているところが多く見られるのだ。



大きな水害のあった1846年(弘化3)年以降に移築されたといわれる「三角家」



が人情。そこで船大工が土地の形に合わせて膨らませたりへこませたりして建てたといわれています。そもそも船に直角の部分はなく、曲線や三角ばかりですから」

船大工の技の凄さがわかるとっておきの場所があると高藤さんが案内してくれたのは、川の名の由来ともなっている古刹「称光寺」。「この山門の扉は左右でつくり手が異なります。三枚の板のつなぎ目をよく見てください」と高藤さん。向かって右の扉は板のつなぎ目のはっきりしているが、左はつなぎ目がほとんど見えない。

「そうです。右は家大工が、左は船大工がつくった扉です。船大工は水漏れを避けるために繊維を『つぶす』つくり方をします。だから隙間が目立たないんですね」

山門のそばに三角家と似たようなつくりの家がある。この家の壁もカーブを描いている。崖に沿って少しでも広くするためだろう。

「宿根木には船大工の棟梁が3人いました。彼らはそれぞれ造船所を構えており、奉行所の船を何艘も建造したそうです。棟梁は船大工を10人くらい使い、小間使いも数人いましたから、45〜50人の技術者がいたという計算になります」

ほかに、船を建造するときの



余材や廃船の板を腰板（壁の下部）に用いた家や、「石」の字を軒下の扇形飾りにあしらった家もある。船大工が住んでいた痕跡だ。

一方、集落内には北前船で運ばれた石が鳥居や橋として残る。

「白山神社の石鳥居は、瀬戸内海から運んだ御影石できています。1773年（安永2）の建立で、御影石とともに宿根木に招いた石工がつくったといわれています」と高藤さん。称光寺川に架かる2本の石橋のうち、上流の念佛橋の側面には1776年（安永5）の年号が刻まれている。石質は花崗岩。鳥居も石橋も白山丸の船主・高津勘四郎が西廻り航路の帰路に尾道から積み、寄進したもの。



「石橋は称光寺から海へ向かう正式な道に架けられています。船主は金持ちですが、儲けを地域に還元する意識も強かった。村の衆も、贅沢している船主の船には決して乗らなかつたそうです」

新田開発を救った 手掘りの「横井戸」

こうした栄華も明治新政府が500石積以上の和船の建造を中止した1885年（明治18）以降、陰りが見える。鉄道や蒸気船に押され、廻船業が衰えるからだ。

「それでも生活はさほど厳しくなかつたと思います。船にまつわる技術をもつ人たちは、主に北海道

へ出稼ぎに行きましたから」と高藤さん。とはいえ、暮らしぶりは一変する。1913年（大正2）に養蚕組合が発足。1916年（大正5）には開墾組合が結成され、段丘上で新田開発を始める。

「最初は山の奥の、水がしたり落ちていたりような窪地から水を引いて田んぼをつくりました。ところが晴れの日が続くとすぐに水が枯れてしまう。ただし窪地そのものは湿っていたので、試しに掘ってみた。すると幸運にも地下水の水脈にぶちあたったのです」

それが「宿根木の横井戸」だ。この一帯は水中火砕岩という隙間の多い岩石なので、雨がしみ込みやすい。宿根木の人たちは勘を頼

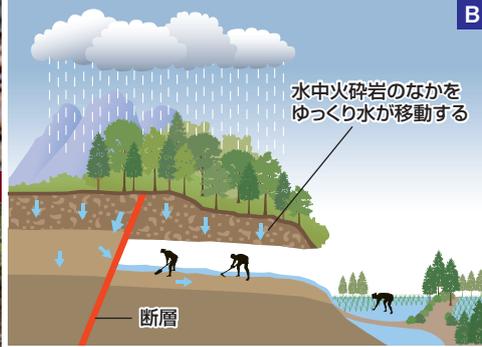
7 称光寺の山門の扉。右が家大工、左が船大工によるもの。つなぎ目に工法の違いが表れている。1717年（享保2）の棟札が残る 8 北前船で運ばれた瀬戸内海の御影石でつくられた白山神社の石鳥居 9 1776年（安永5）に尾道から運ばれ、寄進された念佛橋 10 称光寺川に残る洗い場。上流、中流、下流で用途を使い分けていた 11 石づくりの沈殿槽「セシナゲ」。海を汚さないように、生活排水をいったん溜めてから流した



12



A B



A 手掘りで探りあてた「宿根木の横井戸」。新田開発に乗り出した宿根木の人たちの重要な水源 B 横井戸の構造図。雨がしみ込み、断層から湧き出る水を田に引いた 佐渡国小市民俗博物館の展示パネルと現地の解説板をもとに編集部作成 12 13 「方崖坂(ぼうがんだか)」とその下にある「共同井戸」。宿根木が栄えると高台に住む人が現れた。その人たちが桶を担いで下り、共同井戸で水を汲んで上ったので石の階段がすり減っている



13

りに、山の斜面を横方向へ井戸を掘り、断層の割れ目から湧き出る水脈を見事に探りあてた^B。「水路をつくるためにトンネルを二つ掘り、谷間はサイフォン(注2)式で水を通しました」と高藤さん。宿根木には7本の横井戸があり、今もこの地の水田約28haを潤している。

仲間と情報を共有して得た利益

を集落に還元する船主たち、己の技を身の回りにも応用する船大工たち、そして廻船業の衰えで新田開発に向かった先人の記憶をたどった。宿根木は、歩いて一周するだけなら大した時間はかからない。しかし、水と深くかかわった人々の暮らしの痕跡を数多く留める、きわめて濃密な空間だった。

(2018年11月17日取材)

宿根木の海に浮かぶ 昔ながらの「たらい舟」



3年前から宿根木で「たらい舟体験」を始めた金子啓次さん。杉と竹でたらい舟を自作する希少な職人でもある金子さんに、開業の経緯をお聞きした。

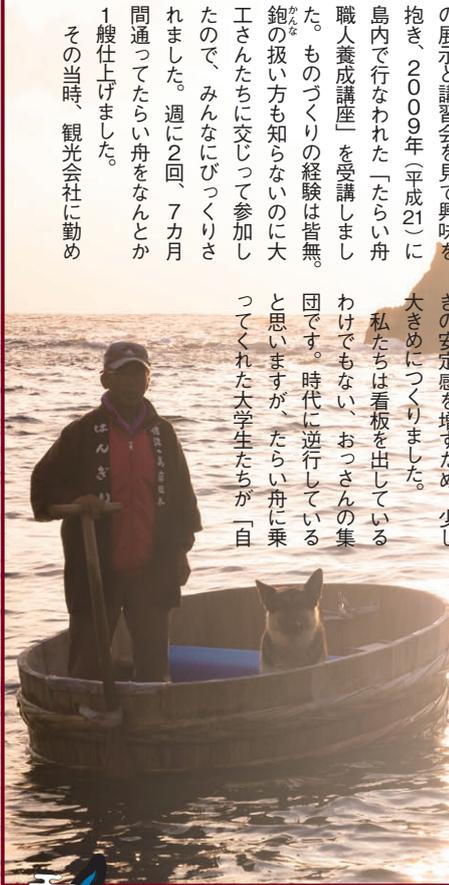


佐渡、特に宿根木を含む小半島一帯では、桶を半分に切ったような形のたらい舟に、乗ってアワビやタコ、ワカメなどの漁がなされています。私たちは「はんぎり」と呼んでいて、起源は明治時代初期のようです。小半島のそばで生まれた60代半ばの私が中学生のころまで多く使われていましたし、乗せてもらったこともあります。桶の職人さんは各々の集落へ向向き、たらい舟を修理していたようです。アメリカ人のダグラス・ブルックスさんによるたらい舟の展示と講習会を見て興味を抱き、2009年(平成21)に島内で行なわれた「たらい舟職人養成講座」を受講しました。ものづくりの経験は皆無鉤(かぎ)の扱い方も知らないのに大工さんたちに交じって参加したので、みんなにびっくりしました。週に2回、7カ月間通ってたらい舟をなんとか1艘仕上げました。

作のたらい舟なんて、逆に時代の最先端ですよ」と言ってくれました。たらい舟から見る宿根木の海の美しさに感動した人たちがSNSで発信してくれるので、3年目にもかかわらずたくさんの方からお問い合わせが来ています。

経営ははつきり言って厳しいですが、宿根木の人々が昔ながらのまちなみを残そうとがんばっているように、手づくりのたらい舟という佐渡の文化を伝えることには意義があると思っています。

(2018年11月14日取材)



その当時、観光会社に勤め

ていた私は、退職後に講師の本間勲次郎さんにたらい舟のつくり方を教わろうと思っていましたが、定年前に本間さんが亡くなります。「自分だけできるのか」と悩みましたが、どこかに再就職するくらいなら、佐渡ならではの手づくりのたらい舟を知ってもらおうと、2016年(平成28)に「たらい舟体験」を立ち上げました。

今、たらい舟は6艘あります。すべて自作です。1艘は漁に用いたものと同じ大きさの安定感を増すため、少し大きめにつくりました。

私たちは看板を出しているわけでもない、おっさんの集団です。時代に逆行していると思いますが、たらい舟に乗ってくれた大学生たちが「自

4本の竹で編んだタガを、木づちで打って締めていく

(注2) サイフォン

液体を一度高所に上げてから低所に移すために用いる曲管。管内を液体で完全に満たしていれば、液体は高い方から低い方に流れることを応用したものの。

[北前船]



恵みを活かして「自立の島」へ

——佐渡の未来への提言



人口減少と高齢化に伴う年齢構成の変化……。今、日本の中山間地域で起きている課題を佐渡も抱えている。しかし、佐渡の豊かな資源を活かして活力を取り戻す方法もあるのではないか？「トキの野生復帰」という試みに惹かれ、10年前から佐渡を定期的に訪れている鈴木基之さんに、「佐渡の現状と未来」をテーマにお話しいただいた。

佐渡には稲作のためにつくられた溜池が無数にある(七浦海岸・橘地区)

トキの野生復帰という 壮大な実験に惹かれて



インタビュー

鈴木 基之さん

東京大学名誉教授
一般社団法人
日本UNEP協会 代表理事

Motoyuki Suzuki

東京大学大学院工学系研究課程修了。博士(工学)。専門は環境化学工学。東京大学生産技術研究所教授を経て、のちに同所長。国際連合大学副学長、同特別学術顧問、放送大学教授、東京工業大学監事(非常勤)、環境省中央環境審議会会長などを歴任。現在も一般社団法人 海外環境協力センター会長、公益財団法人 環日本海環境協力センター理事長などを務める。『環境と社会』『続く時代に何を渡すのか』など著書・編著多数。

佐渡との縁は、トキの放鳥が始まった2008年ごろから深まりました。当時の私は放送大学の大学院で環境工学を担当していました。同時期の同僚で農業経済学を教えておられた河合明宜先生がトキの野生復帰に関心を寄せておられ、その縁で環境省が行なっていた「佐渡におけるトキの人工飼育放鳥」プロジェクトをゼミの修了生たちと見学に行ったのがきっかけとなり、佐渡の方々との交流も始めさせていただきました。

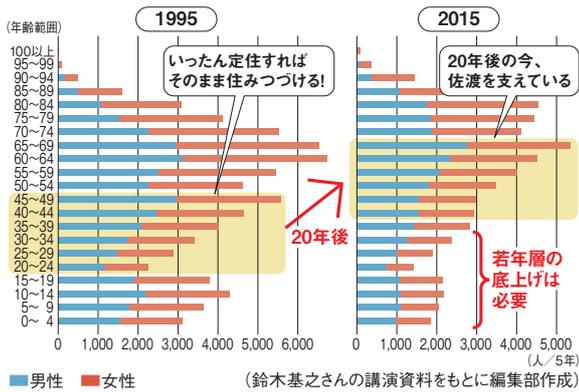
最初の放鳥は10羽でしたが、それが順調に進み、野生でも繁殖・定着していったとき、いったん絶滅したトキは島内でどんな存在になるのかというテーマは非常に興味深いものです。いずれは佐渡の外にも広く分布するようになるのか、増えすぎて農業に対する害鳥となるようなことがあればその生息数をどのように制御するのか、以前のように捕獲や羽毛の利用な

どが始まるのか……。そういったことを考えていくと、壮大な実験が始まっているように思えたのです。

人工飼育や放鳥準備の段階ではトキのエサにドジョウなどを島外からも導入し、与えていたそうですが、自然界でもエサが十分に供給できるようにしなければということで、新穂地区の篤農家(とくのうか)の齋藤真一郎さんたちによって、田んぼをエサとなる生きものが育つ場のように、肥料や農薬を減らした米づくりをする動きが始まります。そして私たちも「田の草とり」などを手伝わせていただくようになりました。

草とりは生やさしいものではありませんから、私くらいの年齢の方がお役に立ったとは思えないのですが、作業を終え地元の方々とお酒を酌み交わすのを楽しみに佐渡に通うようになっていきました。きれいな水を使った佐渡の日本酒はもちろん、農水産物はどれもとてもおいしいですからね。

佐渡市人口・年齢構成の推移

「佐渡藩」のような
自立性まとう道を

現在の佐渡は高齢化が進み、人口減が続いています。江戸時代には10万人が暮らしたと伝えられますが、1950年ごろの12万人をピークに減少し、現在は6万人弱です。1995年と2015年の年齢別の人口を比較すると、95年には30歳から55歳付近にあった中心世代が、60歳から85歳付近へと移っています。一方で95年には一定数いた30歳以下の人口が少なくなっていることから、高齢者が佐渡を担う状況は今後も続くと予想され

ます。現在の40歳から70歳までの人口分布は、20年前の20歳から50歳までの分布とほぼ重なっているという状況も見てとれます。現在の20歳から50歳までの方々が20年後にそのままの形で保持されるとすると、佐渡を支える人口力は激減していくことにもなるでしょう。佐渡がサステイナブルな島になるためには、人口分布の将来像を持続可能な形に改善しなければなりません。当面は高齢者の方々の力で佐渡を魅力的な場所にしていく方法を探る必要があります。

そんな佐渡で私が提案したいのは、島内の豊富な資源による自立を前提にした生活を考えていく道です。都会から文化を取り入れてきた歩みを、あたりまえのように踏襲するのはやめて、佐渡独自の暮らし、若者にも魅力ある姿を探ってはどうかでしょうか。

日本国の新潟県に属する佐渡市というよりは、かつての幕藩体制における藩のような自立した存在を目指してはどうかと思うのです。

島のエネルギーで
これまでにない生活

エネルギーに関しては、船舶で運んでくる石油に頼るのではなく、

島内に降り注ぐ太陽エネルギーを活かして、薪やバイオマス発電で賄うのはどうでしょうか。

以前、私は佐渡に供給される太陽光が森林を育むペースと、島内で必要となるエネルギーの収支を工学的に計算したことがあります。すると、今と同じくらいのエネルギーを使う生活続けるには足りませんが、思いきって生活を見直せば成立する可能性はあります。

例えば、佐渡で都会と同じスピードで走る自動車が必要かといえ、多くの場合はそうではない。軽自動車よりもコンパクトで軽く、ゆっくり走る乗り物を開発すれば、必要な燃料も減ります。私は「馬車でもいいのでは」とすら思います。時間がゆつたり流れる佐渡の雰囲気は合うかもしれません。

そして水です。佐渡は至るところに流れる小河川を活用した集落単位の簡易水道を使って水が供給されています。都会的な見方では整備が行き届いていないように映るかもしれませんが、なんらかの災害時の復旧力ではこちらの方が上です。飲み水をもたらし、捨てる川が身近にあるので、何かを捨てて汚したりすることも起きにくい。小規模水力発電としての活用も期待できますね。可能性を秘め

た水利用システムを見直して、次世代に伝えていくための工夫を考えてはどうでしょうか。

食については、宿泊施設となり得る空き家などが多い地域に給食センターのようなものを建て、そこに島内でとれた魚や米などの農水産物を集中的に運んで、観光客に提供しやすいシステムをつくる手もありますね。島の恵みをもつ魅力を知ってもらう機会を増やし、商品価値を高めることにもつながるかもしれません。離島でありながら、一定の規模をもち、多くの資産を有する島の総合的な将来設計が必要かもしれません。

自分たちが使うエネルギーや水、食べものなどがどこから届くのか、排出するものがどこでどのように処理されるのか……。そうしたことがはつきりわかる生活がこれからは望ましいのですが、佐渡はそれを秘めています。もしも実現すれば、日本各地の行き詰まった都市を立て直していくためのヒントを与えてくれるようにも思います。少しラジカルな提案ですが、そんな思考実験をしたくなるのも、佐渡に大きな魅力とポテンシャルがあるからかもしれません。

(2018年12月21日取材)



【概論2】



トキよ、よみがえれ!

生きものひしめく共生の田んぼ



ヒトにもトキにも
「恵み」の田んぼ

遠くの田んぼに教羽、いた。エサをついばんでいるのか。羽ばたいた。上空を優雅に舞う。夕陽に映える朱鷺色の羽根が美しい。野生のトキが飛ぶのを初めて見た。

佐渡中央部、国中平野の新穂青木地区。見渡す限り、広々とした水田が続く。「これが江です」。地元農家の齋藤真一郎さんが指さした先は、田んぼの畦ぎわ。水路のような水溜まりがあった。「田んぼの水を抜く『中干し期』でも、ドジョウやオタマジャクシなどの生きものがここに逃げ込んで棲めるよう、田んぼの一部に深みをつくって水を溜めてあるんです」。

生きものはトキのエサになる。そういえば、稲刈りが終わった冬なのに水を張った田んぼが散見される。こうした「ふゆみずたんぼ」も生きものが越冬する場所であり、トキのエサ場になるのだ。「畦に除草剤をまかず、草刈機で刈っています」と齋藤さん。「トキは夏になると成長したイネが腹に当たると嫌って、田んぼに入りません。除草剤を使わなければ畦ぎわにミミズやバッタが棲めて、

鉱山で用いられた水扱いの技術を新田開発に応用し、農業を発展させた佐渡において、画期的ともいえる試みが続けられている。トキのエサ場を確保するために2007年から「ふゆみずたんぼ（冬期湛水）」を実践。そこで育てた佐渡産コシヒカリをブランド米「朱鷺と暮らす郷」として販売し、利益の一部をトキの保全活動にあてるなどの、持続可能な農業だ。2011年、先進国初の「世界農業遺産（略称 GIAHS）」に、石川県能登地域とともに認定された佐渡の水田では、どのように共生を目指しているのだろうか？

トキのエサ場になります」。農業や化学肥料を減らし、四季を通じて生きものが棲息できる田んぼ。それは、ヒトの毎日の食卓に安全・安心で「冷めてもおいしい」佐渡産コシヒカリの恵みをもたらすだけではない。野に放たれたトキも育んでいる。佐渡の里山ではトキとヒトが共生している。

夕陽に舞うトキを もう一度見たい

伊勢神宮の式年遷宮で奉納される「須賀利御太刀」。装飾にはトキの羽根が使われている。その神々しい美しさは古くから日本人に愛され「ニッポニア・ニッポン」の学名が付された。だが、農家にとってはイネを踏み荒らす害鳥とみなされ、明治時代以降は換金性の高い羽根を目的に乱獲が続いた。

個体数の減少に追い打ちをかけたのが日本の農業の変化である。

トキが暮らすのは里地里山。林地の木の枝で営巣し、近場の水田の生きものを食べる。農業や化学肥料の多用、コンクリート三面張り水路、耕作放棄地の増加。これらの要因により水田から生きものが消え、トキのエサ場もなくなった。

さまざまな人たちの長年にわたる努力で見事に復活した佐渡島のトキ



1981年（昭和56）、日本では佐渡だけに残された野生のトキ5羽が捕獲され、人工飼育下に置かれた。日本の野生のトキは、この時点で絶滅したわけである。

一方、絶滅寸前までトキの営巣地だった旧・新穂村では昭和30年代から住民による愛護活動が盛んだった。行谷小学校ではケガをしたトキを保護し、飼育していた。

1999年（平成11）、中国からトキのつがいが増呈され、オスのヒナが誕生。日本初の人工繁殖の成功だ。このとき新穂村の村長が「佐渡の空にトキが放たれる日に備えて環境整備を」と訴えた。翌年、村は東京のNPO法人の提案を受けて農家に呼びかけ、無農薬で生きものを増やす不耕起栽培（耕さない水田）に取り組んだ。

この「佐渡トキの田んぼを守る会」7名中の1人が、齋藤さんにほかならない。「夕陽に映えるトキの空を飛ぶ美しさをもう一度見たい、というのが6人の先輩共通の思いでした。私自身は小学1年生のとき行谷小学校で飼育されていたトキを見た記憶はありますが、自然界で見た覚えはなかったですね。不耕起栽培という農業技術に興味があり、そこからトキにかかわるようになったわけです」。

成果の検証のため生きもの調査を実施し、2年目にはふゆみずたんぼを導入。多様な生きものが棲める水田を目指した。齋藤さんは「おもしろいことに平場にはあまりいないヤマアカガエルやイモリ、水生昆虫も増えました」と言う。

雨降って地固まり 佐渡が一つに

だが、トキのエサ場となる田んぼづくりは広がらなかった。「当時、魚沼産に次いで高く売れたのが佐渡産のコシヒカリでしたから」と齋藤さんはその理由を語る。

「生きもの調査やふゆみずたんぼは手間がかかります。減農薬や無農薬にすれば収量は減るし、普通に栽培しても佐渡の米は高く売れる。わざわざ無理して経済効率の悪いことはできなかったわけです」
潮目が変わりはじめたのは2004年（平成16）、市町村合併で一島一市となり佐渡市が誕生してから。高野宏一郎前市長は、人と自然が共存する豊かな島づくりこそ「野生のトキが最後の生息地として選んだ佐渡の使命」であると、大型ヘリによる空中農薬散布の停止などの施策を打ち出した。折しもアクシデントが起きる。



3



1

2



- 1 国中平野の田んぼ。手前の溝は、田の水を抜くときに生きものたちの逃げ場となる「江（え）」
- 2 トラクターで窪みをつけた田んぼの一角。こうしておくとも水が溜まるため、冬でも生きものが棲みやすい
- 3 国中平野を舞うトキ
- 4 トキと佐渡の里山を保全する認証米「朱鷺と暮らす郷」（佐渡産コシヒカリ）



4

市町村合併の年の夏、フェーン現象で熱風が佐渡島を襲い「**粃**」に水分が入る時季に田んぼがカラカラに乾いてしまい、佐渡米はほぼ全滅でした」と齋藤さん。

小売店の棚は他産地の米に奪われた。翌年も翌々年も佐渡の米は売れない。減反政策による生産調整が強化され、米価は下落。農家もJAも市も危機感を強めた。

それが結果的に「雨降って地固まる。佐渡が一つになるきっかけ」だったと齋藤さんは想起する。人工繁殖のトキが最初に放鳥された2008年(平成20)、「朱鷺と暮らす郷づくり」認証米制度が発足したトキのエサ場づくりを通じ、生きものと共生してつくった米をブランド化して付加価値を高め、環境保護を生産者の利益につなげる戦略だ。認証米の売り上げの一部を佐渡市トキ環境整備基金に寄付する。

目的はトキとヒトが共生できる里山環境を取り戻すこと。そのため水田の生態系を豊かにする農法を取り入れる。「朱鷺と暮らす郷づくり」認証米の要件は次の通り。

- 生きものを育む農法で栽培
- 生きものの調査を年2回実施
- 減農薬・減化学肥料(地域慣行比5割以上の削減)で栽培
- 県からエコファーマー(安全・安心

な農業の実践者)の認定

• 除草剤を散布しない(2017年産からの新要件)

• 佐渡島内で栽培

「生きものを育む農法」とは、江、ふゆみずたんぼ、魚道の設置、および2017年産からの新要件として無農薬・無化学肥料栽培。このうちどれか一つを実践していればよい。例えば田んぼの一角を江にすると、そのぶん収量が減るので市から補償金も支給される。

「トキと共生する里山」が日本初の世界農業遺産へ

認証米制度に参加する農家は初年度から256戸、面積426haに上り、「蓋を開けてみたら予想外に集まった」と齋藤さんは語る。

2011年(平成23)には「トキと共生する佐渡の里山」が、豊かな生態系や地域固有の文化を背景とする伝統的な農業システムを時代と環境の変化に適応させながら維持・継続させているとして、FAO(国連食糧農業機関)から「能登の里山里海」とともに日本初の「世界農業遺産」に認定された。

同年の認証米制度参加農家は685戸、面積1307ha。現在でも全農家数の10%、面積にして25

トキの保護と野生復帰 略年表

| 西暦 | 年号 | 出来事 |
|------|------|--|
| 奈良時代 | | 『日本書紀』にトキの名が記される |
| 1922 | 大正11 | 『日本鳥類目録』で学名Nipponia nipponを採用し定着 |
| 1926 | 大正15 | 『新潟県天産誌』で「濫獲の為め其の跡を絶てり」とされる |
| 1927 | 昭和2 | 佐渡支庁、トキ発見を懸賞で呼びかける |
| 1931 | 昭和6 | 佐渡金沢村(旧 金井町)で2羽のトキが再発見される |
| 1934 | 昭和9 | トキ、天然記念物に指定される |
| 1959 | 昭和34 | 旧 新穂村、旧 両津市でトキの給餌を開始 |
| 1967 | 昭和42 | トキ保護センターを建設し、トキ3羽の飼育を開始 |
| 1968 | 昭和43 | 「キン」が捕獲され、トキ保護センターで飼育開始 |
| 1981 | 昭和56 | 野生のトキ5羽を一斉捕獲。国内の野生のトキは絶滅 |
| 1985 | 昭和60 | 「ホアホア」を中国から借用 |
| 1993 | 平成5 | 旧 新穂村長畝に佐渡トキ保護センター開設 |
| 1999 | 平成11 | 中国から「友友」「洋洋」のペアが到着。人工繁殖により「優優」誕生。翌年に「新新」「愛愛」も生まれ、これ以降は順調に増える |
| 2003 | 平成15 | 日本産最後のトキ「キン」が36歳で死亡 |
| 2008 | 平成20 | 野生復帰に向けて第1回目の試験放鳥(10羽)実施。また「朱鷺と暮らす郷づくり」認証制度開始 |
| 2011 | 平成23 | 「トキと共生する佐渡の里山」が国内初の「世界農業遺産」に認定される |
| 2012 | 平成24 | 放鳥されたトキのうち3組が繁殖に成功、8羽のヒナが巣立つ |
| 2018 | 平成30 | 300羽以上のトキが佐渡島内で棲息中 |

環境省、佐渡トキ保護センター、我孫子市鳥の博物館のホームページなどを参考に編集部作成



5 農業生産法人 有限会社齋藤農園の代表取締役、齋藤真一郎さん 6 佐渡市役所産業観光部 農業政策課里山振興係の係長、宇治美徳さん 7 片隅に水が残る初冬の田んぼでエサを探すトキ



トキのエサ場となる田んぼの生態系再生への取り組み



農家による「生きもの調査研修会」



農家同士でグループワークなど研修会も実施



生きものの生息環境を確保する「江」の補修
(提供:佐渡市役所)

「前後を維持している。佐渡市役所農業政策課里山振興係の宇治美徳さんは「島の農家数全体が減っているなか、生物多様性を豊かにする共通認識のもと認証米制度に取り組みことで、農業を続ける意義の厚みが少し増しているのかもしれない」と手ごたえを感じる。「行政がやらせているのでは?とよく言われるのですが、そうではありません。農家さんの主体的な取り組みを核に、関係者が一体となって協議し進めています」

長年の経験を経て、全面的に水を張るふゆみずたんぼよりも、部分的に湿ったところを設けた方がトキにもヒトにもよいことがわかった。びっしり水を張ると、足の短いトキは近寄らないし、ヒトにとっては水はけが悪く土壌が柔らかくなり農機が動かない。常に改良を加えながら進めているのが佐渡の認証米制度だ。要件も例外ではなく「申請書が煩雑で拡大計画も必要なエコファーマー認定を外し、実質的な品質基準のみにすればもっと広がる」といった方策も検討されている。環境省の当時のロードマップでは2020年までに佐渡で220羽のトキを野生に定着させる予定だったが、すでに350羽を超え

た(注)。「朱鷺と暮らす郷づくり」がさらに進めば、若い農業志望者も佐渡に惹かれ、生物多様性豊かな

な里山環境が末長く持続していくに違いない。
(2018年11月13日取材)

なぜ佐渡の里山は世界農業遺産に認定されたか

ボリコム・チャールズ

国際連合食糧農業機関駐日連絡事務所長

昔から人間は、生活する地域の環境に適応し、持続可能な食料生産の工夫を重ね、その知恵を継承してきました。こうした伝統的な価値の高い農林水産システムが世界農業遺産(以下、GIAHS II ジアス)に認定されます。

認定基準は次の五つ。①食料と生計を保障するシステムであること、②生物多様性と遺伝資源が豊富であること、③地域の伝統的な知識・慣習・技術を継承していること、④地域を特徴づける文化・風土・社会組織を背景としていること、⑤人間と自然の相互作用によって発達してきた里山・里海の景観があること。

各国・地域からの申請に基づき、世界中から選ばれた7人の専門家による世界農業遺産科学助言グループ(SAG)が調査して、国連食糧農業機関(FAO)がGIAHSを認定します。2002年から始まり、2018年12月現在、世界21カ国で57地域が認定されています。

ユネスコが認定する世界遺産との違いは「動的保全」が特徴であること。気候・環境・技術・人材が変化するなかで、いかに将来の子孫に残していける持続可能な農林水産システムを維持していくか、続けられるように変える、そのダイナミズムが評価されます。

「トキと共生する佐渡の里山」は、まさにダイナミックな持続可能性を実現し



ています。トキが棲めなくなったのは環境が悪化したせいだと気づき、誰かに命じられたのではなく自分たちで決めて農薬や化学肥料を減らし、江などをつくって水を溜め、生きものを増やす田んぼづくりへと転換しました。すると、放鳥され野生化したトキがやってきてエサにする。これは素晴らしい考えであり、取り組みです。私も子どもたちと一緒に田んぼに入って「生きもの調査」に参加しました。楽しかったですよ。景観もすばらしい。

GIAHSにもっとも多く認定されているのは中国で15地域ですが、日本は狭い国土にもかかわらず11地域で世界第二位。とても優秀だと思います。2013年には石川県七尾市でGIAHSの第1回国際会議を開催しました。採択された能登コミュニティのなかで「認定された地域間の交流やネットワーク化の促進」が盛り込まれています。

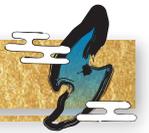
その後、日本の認定地域にウガンダやエチオピア、ブラジルなど途上国の研修生が招かれ、多くのことを学んで帰りました。これからも世界の持続可能な農業に日本は貢献できると思います。

(2018年12月5日取材)

(注)トキの生息数

2019年1月、環境省はトキの生息数が増えたとして、国内での評価を「野生絶滅」から1ランク危険性が低い「絶滅危惧1A類」へと21年ぶりに見直した。日本の動物で「野生絶滅」を脱したのはトキが初となる。





水の恵みと可能性に満ちた島

島の恵みとトキの絆

佐渡の水津集落にある漁家民宿に泊まった日、夕食を見て驚いた。旬を迎えたズワイガニ。ホッケと見まごうような大きなカレイの焼き魚。タラの切り身と大根を炊いたもの。野菜の天ぷら。サザエ。白子の酢和え。カニみそのみそ風味。キモの煮つけ。エビとタイの刺身。イクラの大根おろし和え。デザートはキウイ。これらはすべて佐渡で採れたものという。

キウイは島内の親戚が、米は民宿のおかみさんが、野菜はおばあちゃんが育てた。タイは「関東からお客さんが来るから頼むね」と言ったら別の親戚が釣ってきた。すごい食事ですねと言うと「こんなの普通よ」と笑われた。そのおかみさんが米をつくる集落そばの崖の上の田んぼにトキがいるという。風の強い海沿いなのにトキ？

「いますよ！5羽の群れが棲みついて最近2羽加わったの」翌朝、その田んぼを案内してもらおう。よくよく聞いてみると、おかみさんはトキを呼ぶために活動するピオトープの会の副会長だった。「青年団とか婦人会と

は違って、年齢や性別に関係なく、集落のみんながかわれるからおもしろいのよね」。

ちよっと待ってねと、おかみさんはトキが来ているか見に行く。「いなかかったわ」と残念そうに戻ってきたそのとき、上空にトキの姿が。5羽いた。

「ほら、いたでしょ！これが見せたかったの！」と声を弾ませるおかみさん。集落の人々が田んぼを補修してドジョウなどエサを放ったその場所にトキが来る。それは地域への愛着も高めることを知った。

うれしい誤算と計算外

とはいえ、島の人みんながトキに関心があるわけではない。別の宿の主人は「見たことないなあ」と言った。農家の人々にも温度差があったと教えてくれたのは齋藤真一郎さん。トキのエサ場をつくるには草刈りなどの手間がかかり収量も減る。当初は「反対派」もいた。「ところがトキはなかなかの役者でね。反対派の田んぼを選んで降りるのです。自分の田んぼにトキが舞い降りたらうれしいんですね。ついこの前まで反対していたのに『やっぱりトキは

大事だ』と言いつ出す人が続出しました」と齋藤さんは笑う。

関係者の努力によってトキは当初想定していた以上のスピードで増えている。そのため「このまま増えつづけるとトキは再び害鳥になる恐れがある」と危惧する声もある。「たしかにそうかもしれないですが、それはそのとき考えましよう」と齋藤さん。「人と自然の共生」と簡単には括れない難しさはあるが、それは前例のない取り組みだからこの計算外。まずやってみる、そして見直すという柔軟さが大切なのだろう。

時代で変わる営みと水

減農薬やふゆみずたんぼなど、非常識な農法でトキをよみがえらせた佐渡。その歴史に水はどうかわっていたのか。

かつて、砂金採取には水で土砂を洗い流す方法が用いられた。谷に大木を渡してその上に家を建てる者さえ現れたという相川

金銀山では、水上輪をはじめとする技術で排水を行ない、それは島内の食糧確保のため農業にも転用される。

また、産出された金銀の積み出し港に指定された小木港を中

心に、佐渡の米、竹、藁と藁製品が北前船で開拓期の北海道へと運ばれ、財をなした者も多かった。これも水の力といえる。

江戸時代初期をピークに金銀の産出量は落ち込んでいくが、明治時代以降には水も用いる選鉱法で増産に成功。その鉱山で多用された桶や樽は、地震によって隆起した小木半島一帯で明治時代初期からたらい舟として漁に用いられている。

さらに、鉱山で利用する炭や木材などの資材を確保するため佐渡奉行所が山間部に設けて厳しく管理した「御林」が、結果的に森の荒廃を防いだことも見逃せない。御林がどれほどの面積でどう推移したのかはつまりからではないし、幕府が自らの財源確保のために行なったことなのだが、結果として佐渡に豊かな森を残し、その森が育む栄養豊かな水が田んぼと里山、島周辺の漁場を支えた。だからこそ、佐渡はトキの国内最後の生息地だったのだ。

今も昔も一つの産業の隆盛と衰退は人々の暮らしに大きな影響を与える。島であるがゆえに、また金銀という量に限りがあるものであったがゆえに、佐渡の

編集部

歴史にはその光と陰が濃密に現れている。しかし、水を巧みに利用し、時代ごとに適応してきた人々の営みは実にたくましい。

都市部に住んでいると、雨や雪はめんどくさいものと思いがちだ。ニュースでも雪による障害ばかりを報じる。その一方、岩首昇竜棚田の大石惣一郎さんは「今年の佐渡は雪が少ない。春からの田が心配だ」とSNSで発信する。この感覚は、都市住民が失って久しいものだ。

時代の空気をもっとも敏感に感じとるのは若い世代だが、佐渡には若者が定期的に訪れているという。今回見聞きしただけでも、岩首昇竜棚田と宿根木のたらい舟に若者が集い、その暮らしや文化を称賛している。それは、佐渡には人が大切にしなければならぬ根本的なものが残っていると感じているからではないか。そして、そこには必ず水が介在する。

佐渡はその地形と文化の特性から「日本の縮図」といわれる。とすれば、時代ごとに水を巡らし生きてきた文化が残る佐渡の今を見て歩いて感じることは、私たちの未来を考えることにつながるのだと思う。

ドナウ川

——黒い森から黒海まで

斎藤茂吉の歌

池上俊一著『森と山と川でたどるドイツ史』（岩波書店・2015）では、ドイツには日本の川とまったく違う、満々と水をたたえた大河がラインとドナウのほか、マイン、エルベ、モーゼルなど多数あり、それらはまさに大量の荷物を貨物運搬船で運ぶ大動脈になっているという。ライン、ドナウ、マインの三河川をつないで北海から黒海までの水運の網の目を張り巡らされたのは1992年である。ライン川は「父なるライン」と、ドナウは「母なるドナウ」と呼ばれ、ドイツ人の心の故郷でもある。

丹下和彦・松村國隆編著『ドナウ河——流域の文学と文化』（晃洋書房・2011年）では、斎藤茂吉はドイツ留学の時にドナウ源流を巡り、詠んだ歌碑がある。1723年につくられたフェルステンベルク城の庭園脇の階段を降りると、円形のドナウ泉があり、そのそばに、「大きき河ドナウの遠きみなもとを尋めつつぞ来て谷のゆふぐれ」と、日本語とドイツ語で刻まれている。茂吉は1924年4月18日ミュンヘンから出発し、ドナウの泉を訪れている。

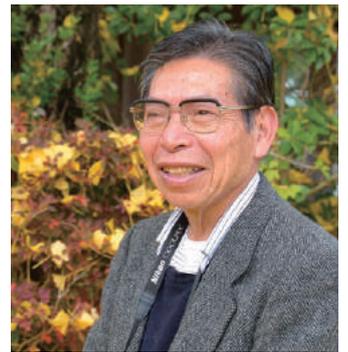
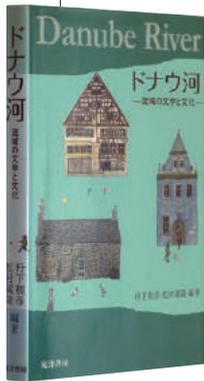
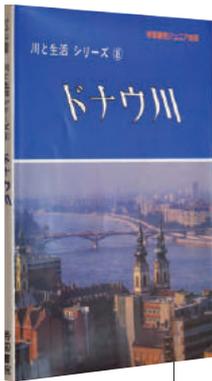
そのときの歌を掲げる。

〈ドナウ川の岸の葦むらまだ去らぬ雁のたむろも平安にして〉

〈黒林のなかに入りゆくドナウはふかぶかとして波さへたたず〉

〈なほほそきドナウの川のみなもとは暗黒の森にかくろひけり〉

この書では、ドナウ川の流れた沿った都市、ウルム（アインシュタインの生家、ウルム大聖堂）、レーゲンスブルク（レーゲンスブルクの石橋・グリム童話）、ウイーン（音楽都市ウイーン・ハイドゥン、モーツァルト、ベートーヴェン、ヨハン・シュトラウス二世世、シューベルト、マーラー、思想家フロイト、シュニッツラー）、ブダペスト、ベオグラード河口までの流域の歴史と文学と文化を追っている。



古賀 邦雄

こがくにお

古賀河川図書館長
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

ドナウ川の流

ドナウの源流について、堀淳一著『ドナウ・源流域紀行——ヨーロッパ分水界のドラマ』（東京書籍・1993年）がある。ドナウ川の最上流の支流の一つブリガッハ川の水源の池のほとりの説明版に、ケルト人の絵と写真があり、ケルト人をもっとも崇めたものに泉があり、泉の女神像が刻まれていた。ここは茂吉が詠んだシュワルツワルト（黒い森）に近い。

ドナウ川最上流のもう一つの主な支流はブレク川で、ここも泉が湧き出している。池には「この泉がドナウ川の地理的長さを測る時の原点。ドイツ国内の長さ647キロ」、また「ドナウの源。ここからドナウの筆頭源流支流ブレクが出ている。海拔1078メートル、河口から2888キロ。ドナウーライン間すなわち黒海―北海の分水界から100メートル」と書かれている。この書は、ドナウの源流について、他にいくつもの流れと分水界を踏査している。

C・A・R・ヒルズ著『ドナウ川』（帝国書院・1987年）は、ジュニア地理として川と生活シリーズのなかの一冊である。ドナウ川は、ドイツ、オーストリア、旧チエコスロバキア、ハンガリー、旧ユーゴスラビア、ルーマニア、ブルガリア、旧ソ連を流れている。ルーマニアではすべての川がドナウ川に合流し、オーストリアでもほとんどの川が、また旧ユーゴスラビアではほぼ3分の2がドナウ川に流れ込む。その支流は300以上にもなる。

ドナウ川の特徴に、野性的な姿を現し、水の量が急に増えたり、減ったりすることがある。それは、この川の主流や支流がさまざまな気候地帯を流れ、大洪水と渇水を引き起こす。

ジブシー（ロマ）は、インドからヨーロッパへやってきて、その長い旅の途中でドナウ川と出会い、「ドナウ川は、ほこりのない道路」と言っ

いる。おもしろい表現である。

デイビッド・カミング著『**ドナウ川**』（併成社・1995年）には、延長2860km、世界で25番目の長い川、ヨーロッパではボルガ川に次いで2番目で、流域面積81万7000km²、下流の広大なデルタ地帯の面積は、4152km²とある。

ドナウ川の源流、黒い森から、ドナウエッシンゲンを過ぎ、中流ブダペスト北部で急に曲がり、ハンガリー大平原を流れ、ベオグラードを後にして、やがてもっともスリルのあるカルパティア山脈とユーゴスラビア山脈に挟まれた鉄門と呼ばれる八つの峡谷を下る。ここには1971年にダムが完成し、小型船でも安全に航行できることになった。

さらに、ドナウ川はルーマニアとブルガリアの国境線の流れ、ルーマニア国内を通り抜け、ウクライナとの国境線沿いに流れ、デルタ地帯に入る。デルタ地帯は泥や砂、アシに覆われて多数の浮島がある。ここから三つに分かれ黒海へ注ぐ。

ドナウ川の航行の危険を取り除くために、18世紀から19世紀にかけて岩場が爆破され、また、ドナウ川流域には、イップス・ペルゼンボイクにダムが建設され、鉄門ダムをはじめ多くのダムが建設された。ドイツに5基、オーストリアに9基、ルーマニアと旧ユーゴスロバキアの国境沿いに2基、スロバキアに1基完成。ダム建設は船の航行の安全のため、川の水量のコントロール、そして水力発電としたものである。一方、原子力発電所は原子炉を冷却するために利用されているが、工場などの汚水、環境破壊が問題視されている。

ドナウ川の紀行

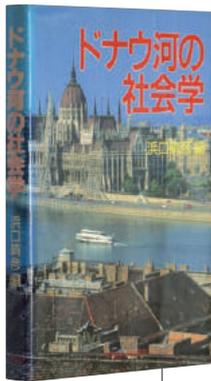
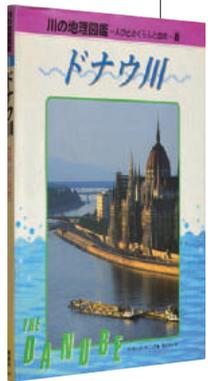
ドナウ川の紀行に関する書を挙げてみる。

中村光夫著『**ドナウ紀行**』（日本交通公社・1978年）には、旧ソ連の乗客船でのドナウの川下りの様子が、ゆったりと、自由な気ままな旅を楽しんでいる。

加藤雅彦著『**ドナウ河紀行―東欧・中欧の歴史と文化**』（岩波新書・1991年）では、ドナウ流域の諸民族であるゲルマン、スラブ、マジヤールラテン、ユダヤの背後にある一つの世界が数世紀にわたって存在してきたことを描く。ドナウ川流域の諸国間の複雑な交錯を著した書である。

オーストリアのヴァッハウには、古城が多い。ドナウ川の北にはボヘミア山地、南にはアルプスが立ちほだかつて、東西の交通を遮っている。したがって、ドナウは東方民族にとっては、西へ進む唯一の通路であった。こうした要衝ともいべきドナウ一帯は城で囲まれた。

ウインナ・ワルツの誕生はダンスのみならず社会革命だという。メヌエットと対照的にワルツは最初から指定の男女がペアを組み、互いに相手と体を密着させて踊る。それは保守的な上流階級には不道德そのものと映った。シュトラウスの時代に、ウインナ・ワルツはあらゆる階層に行きわたった。



南ドイツの川と町

南ドイツの川と町について、次の書がある。

柏木貴久子・松尾誠之・末永豊著『**南ドイツの川と町**』（三修社・2009年）では、イーザル川、イン川、ドナウ川、ネッカー川を捉える。イーザル川は、オーストリアのチロルからドイツのバイエルンへ流れるドナウ川の支流である。その流域の多くをドイツ最大の面積を誇るバイエルン州の東南部に有し、ミュンヘンの中心を流れている。ミュンヘンの人々には「緑の川」と呼ばれている。イン川はスイスのエンガディンの山中を西から東へ貫流し、ドイツのバイエルン地方に入り、パッサウでドナウ川に注ぐ。ネッカー川はドイツの南西部のシュヴェニンゲン沼沢地を水源として、北へ流れて、バーデン・ヴュルテンベルク州のマンハイムの町でライン川に注ぐ。氾濫が多く、流域の人々に大きな被害をもたらし、暴れ川の異名をもつ。

鈴木喜参著『**ドナウの南とエルベの東**』（大学教育出版・2010年）は、ドイツ地誌入門となっている。

ドナウ川諸国の統合

ヨーロッパの統合の夢は、政治的にEUの連合でつながったと見えるが、現状ではまだ、模索が続いている。ヨーロッパの経済的な統合の夢は、1992年ドイツのケールハイムでドナウ川の支流アルトミュール川から始まったと言える。分水嶺を越えてレグニッツ川との間が運河化し、ニルンベルグを経由して、バンベルグでメイン川とつながり、ビュルツブルク、フランクフルトを経て、ライン川と結ばれる。

ドナウとラインというヨーロッパの代表的な流れの統合で北海と黒海がつながった。その距離3500kmである。浜口晴彦編『**ドナウ河の社会学**』（早稲田大学出版部・1997年）は、ドナウ川流域の諸国について、ドナウ川を通じて論じる。

一方、クラウディオ・マガリス著『**ドナウ―ある川の伝記**』（NTT出版・2012年）は、ドナウ川をあらゆる角度から事細かく分析する。訳者・池内紀氏は次のように解説する。

歴史と文化を育んで、いかに生み出したのかを、160ばかりの短章に分けて検証する。例えばブルガリアのドナウ右岸流域にはさまざまな人が住んでいる。ブルガリア人、トルコ人、ギリシヤ人、アルバニア人、アルメニア人、ユダヤ人らの行動、考え方を考察し、ドナウ川をたどりながら目に見えない地図を描くように広大な文化圏を点描する。

以上、ドナウ川の流れに沿い、茂吉が巡った黒い森から黒海まで、その歴史、文化を追ってみた。黒海の書としてチャールズ・キング著『**黒海の歴史―ユーラシア地政学の要諦における文明世界**』（明石書店・2017年）がある。

〔黒海へ注ぐとも知らず冬ドナウ〕（吉永貞志）

暮らしながら守る 文化財

—島根県大田市大森町

魅力づくりの
教え 12



1



3



2

人口減少期の地域政策を研究する中庭光彦さんが「地域の魅力」を支える資源やしくみを解き明かす連載です。



中庭 光彦
なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部
事業構想学科教授

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策・観光まちづくり。郊外・地方の開発政策史研究を続ける一方、1998年からミツカン水の文化センターの活動に携わり、2014年からアドバイザー。「コミュニティ3.0—地域バージョンアップの論理」(水曜社 2017)など著書多数。

他とは少し異なる 世界文化遺産

2019年2月現在、日本には22の世界遺産がある。昨年登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のおかげで長崎県にはさらに観光客が訪れている。一方、二つの遺産を抱えるバルセロナでは観光客が増えず、市中心部から生活者が逃げ出す例も出てきている。観光客と地元暮らし。世界遺産には効果もあれば課題もある。

では、2007年(平成19)に登録された石見銀山^{いわみ}はどうか? 今回、世界遺産登録後の魅力づくりを調べるつもりで訪れたが、どうも他の登録地とは異なるように見える。石見銀山の入口となる島根県大田市大森町には「石見銀山 大森町住民憲章」が次のように掲示されている。

このまちには暮らしがあります。

- 1 修理や建て替えが重ねられてきた大森町のまちなみ
- 2 大久保間歩のそばにある岩盤加工遺構
- 3 大森町内に掲げられている「石見銀山 大森町住民憲章」



石見銀山開発初期(16世紀)に銀鉱石を博多へ積み出した「鞆ヶ浦」



戦国時代から銀の積み出しなど外港として栄えた「沖泊」



「代官所跡」の表門。この奥に石見銀山資料館がある



初代奉行を務めた大久保長安の名を冠した「大久保間歩」の入口

私たちの暮らしがあるからこそ世界に誇れる良いまちなのです。私たちはこのまちで暮らしながら人との絆と石見銀山を未来に引き継ぎます。

記

- 未来に向かって私たちは
 - 一、歴史と遺跡、そして自然を守ります。
 - 一、安心して暮らせる住みよいまちにします。
 - 一、おだやかさと賑わいを両立させます。
- 平成十九年八月 制定

使いながら守る 木造建築の景観

「おだやかさと賑わいの両立」とはどのような意味なのだろうか。

石見銀山観光の中心地・大田市大森町は人口400人。ここには年間約37万人の観光客がやってくる。江戸時代には石見銀山の代官所、明治以降は旧瀬摩郡役所があった中心地で、1956年(昭和31)に大田市と合併した。

銀山地区には鉱山、そして銀山を管理した武家、町家、代官所の

まちなみが残り、1987年(昭和62)に、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

ユネスコ世界遺産委員会で世界文化遺産(以下、世界遺産)に登録されたのは2007年(平成19)。国際記念物遺跡会議(ICOMOS)による「登録延期」勧告を覆しての決定だった。

登録延期の勧告理由は、修景(注1)の繰り返し返されたまちなみに「顕著な普遍的価値があるのか」と疑問がもたれたためだった。大森町には人々が暮らしており、修理・建て替えは繰り返される。暮らす人々には、このまちなみが文化財という思いがあり、修景のときは景観の調和に協力してきた。

この「使いながら手入れされてきたまちなみ」が世界文化遺産として保全すべき対象なのかどうかと議論を呼んだわけだ。結局日本政府は、石見銀山を鉱山と環境保全を両立した鉱山遺産と説明を変え、登録を勝ちとった。

この例は、木材特有の「腐る・朽ちる」という条件のなかで、暮らしつつけながら修理しつつ景観を保全すること、「昔のまま」と考えて保全する常識の間に、空白領域があることを私たちに教えてくれる。

過剰な賑わいを 抑制する石見銀山

ここで世界遺産としての石見銀山を説明しておこう。

登録地域は「銀鉱山跡と鉱山町」、そこから港まで銀を運んだ「街道(石見銀山街道)」、「港と港町」の三つの分野からなる。港は鞆ヶ浦と沖泊、そして銀山に必要な物資を搬入した温泉津である。

銀山地区の目玉は、間歩と呼ばれる坑道に入れることである。われわれは「大久保間歩」を実際に案内してもらった。ここは江戸幕府の初代銀山奉行・大久保長安の名を冠した坑道で、約1000ある間歩のなかでも最大規模という。予約制でガイドと一緒になければ入ることができない。

大久保間歩の見学は、石見銀山世界遺産センターに集合してから10分ほどバスで移動、そこから徒歩で巡る約2時間30分のコースだ。途中、金生坑と呼ばれる水抜き坑を眺めながら歩くと目的の大久保間歩に着いた。手掘りの跡が残り、今も銀の痕跡がよくわかる。石見銀山ガイドの会、小沢忍さんの説明が実にわかりやすい。ガイドはおよそ60人いる。翌日、まちなかを案内していただいたガイドの伊

(注1) 修景

都市計画・道路計画などで、自然の美しさを損なわないよう風景を整備すること。



藤壽美^{すみ}さんも地元の人ならではの説明だった。ガイドの会は、石見銀山のすばらしさやまちの魅力を伝えている。

そういえば、まちなかに有料駐車場がない。中央部に無料駐車場があるだけで空き地に有料駐車場をつくらせない。しかもメインストリートは、日中は一方通行。まちなかの狭い道路が車の行き来で混雑しないようにコントロールされている。人々の暮らしに支障が出ないように、過剰な賑わいが上手に抑えられている。

銀山の歴史についてくわしく教えてくれたのは、大田市教育委員会 教育部 石見銀山課の遠藤浩^{ひろ}巳^み課長と石見銀山資料館学芸員の藤^{ふじ}か

原雄高^{たか}さんだ。石見銀山資料館の建物は幕府の代官所跡で、1902年(明治35)に建てられた郡役所をリフォームしたものだ。県や市ではなく住民が化財資料館を自主運営しているのも珍しい。

おだやかな暮らしの魅力

魅力ある場にはおもしろい人々がいる。まずお会いしたのは三浦類^{るい}さんだ。

大森町には石見銀山生活文化研究所(以下、生活文化研究所)という有名なアパレル・ライフスタイル企業と、義肢装具メーカーでこちらも世界的に有名な中村ブレイス株式会社が存在する。人口400人の町に

二つの企業が立地している「企業城下町」と呼んだら言いすぎだろうか。しかも、どちらも「大森町・石見銀山」を前面に出しているところに、地元を愛しつつ世界展開を志向を感じさせる。

三浦さんは生活文化研究所の社員で『三浦編集長』という名の広報紙を編集している。自社の商品ではなく、大森町の暮らしの魅力を紹介しているのだ。

生活文化研究所は、まちの中心から少し離れた場所にある。外から見ると田んぼの奥にある庄屋のようだが、中に入ると現代的なオフィスが現れ「こんにちは」と一斉に挨拶された。三浦さんは「大森町の小学生は知らない人にもみんな挨拶しますから」と話すが、われわれは社員全員からその洗礼を受けたようだ。店舗、事務所、作業場、倉庫と拝見したが、皆さんから挨拶される。このような企業にはなかなかお目にかかれない。三浦さんは愛知生まれで、東京の大学を出て大森町にやってきた。その彼が大森町を「都市コミュニティ」と呼ぶのは興味深い。大森町は、元は郡の中心地なので人々のつきあいがベタついていないのだ。「このまちの人はみんなこのまちが好きです。地元愛がすごく強

い」と言う。三浦さんはまだ学生だったとき、生活文化研究所の創業者で現会長の松場大吉さんと出会ったが、松場さんは自身の会社の話をまったくしなかったそうだ。

「大森町の人や暮らしのお話ばかりでした。まちの人たちも見知らぬ学生にごはんを食べさせてくれたり、一緒に海へ遊びに行ったりする。とても心地よかったです」。三浦さんは2011年の春に入社し、大森町で働きはじめる。「住民憲章」に掲げられ、三浦さんも惹かれて「おだやかさ」とはどのような意味なのか？

三浦さんは「本来ある日常、平穏な暮らしということで、ないものは自分で工夫することです」と言う。私たちは「ないときは買う」という一般的な経済の尺度で物事を考えがちだが、工夫して価値をつくるのが大森町の文化なのだろう。続けて三浦さんは「このまちに、文化財は大事だと気づいた人がいました。大森町文化財保存会の方々です」と言う。

三浦さんの口から出た大森町文化財保存会はまちづくりの推進役だ。その現会長である龍泉山^{りゅうせん}西^{さい}性寺^{しょうじ}のご住職、龍善暢^{りゅうぜんちやう}さんにもお話を伺った。

大森町文化財保存会は60年ほど



13



10



8



9



12



11

4 大久保間歩の坑内を見学する参加者たち 5 石見銀山ガイドの会の小沢忍さん 6 石見銀山ガイドの会の伊藤壽美さん 7 大森町の中心部はこのように素朴な木造家屋が多い 8 大田市教育委員会石見銀山課 課長の遠藤浩巳さん 9 石見銀山資料館学芸員の藤原雄高さん 10 畦道の奥にあるのが石見銀山生活文化研究所の社屋 11 内部は近代的なオフィス空間となっており、訪問者は外観とのギャップに驚く 12 石見銀山生活文化研究所の三浦類さんと三浦さんの愛犬・うさこ君 13 龍泉山西性寺の住職、龍善暢さん

文化景観を維持する 「適応的リユース」

前の1957年(昭和32)に大森町の全町民を会員として発足した。その後、大森小学校には石見銀山遺跡愛護少年団(以下、少年団)も結成され、「自分たちのまちなみが文化財である」という気持ちを強くもつようになっていったと言う。実際に昭和30年代のまちなみの写真を見ると、朽ちる建物も多かったようだ。それがどんどん修築(注2)、修景されて現在のまちなみ景観がある。なぜなのか。少年団出身の住職は「そもそもこのまちには何をイイと感じるかの審美眼・センスをもって住んでいる住民も多い」と言う。このことが「家はどこでも買えるけれど、借景は買えないですから」と景観を大事にする気持ちにつながるのではないかと語る。

暮らしのおだやかさを求める心と、景観がみんなのものであるとの認識が融合した文化。ここに大森町の核心がありそうだ。

大森町のまちづくりにかかわった人々の聞き書き集『銀のまちをつくった人たちの話』(NPO法人緑と水の連絡会議2012)という好著がある。そこには中村ブレイス・現

会長の中村俊郎さんが住民と市と協力して60軒ものまちなみ保存を行なったことが記されている。古民家を壊しもせず、朽ちさせもせず、プレハブ住宅にもせず、集落消滅もさせず、「昔のまま」の景観が残っているのは驚きであるし、重要だ。

大森町の人々は、「住民による文化財保全」と「おだやかな生活重視」を結びつけ、「世界遺産登録はおだやかな生活の手段」と思っている。それを二つの有力企業が支援し、その企業は大森町の価値を前面に押し出している。

湿気が多い環境では、暮らしが変われば建物も変わる。環境に合わせながら何度も修景し「昔のまま」を追求する。この「適応的リユース(Adaptive Reuse)」によりできあがる「文化景観」は、今後さらに重要となるだろう。

大森町の人口は現在400人。しかし、私には、小さな都市の先駆例に思える。

〈魅力づくりの教え〉
あえて観光地にせず、生活の舞台を文化財と認識することで、価値を生み出す景観がつけられる。

(2018年7月20〜22日取材)

(注2)修築
建築物をつくろい直すこと(修理・修復)。



大森町の人たちが「立て看板でまちの景観を壊さないように」と路面に埋め込んだ案内板

舟運と文化の蓄積が もたらした

こづゆ

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は、福島県会津若松市の郷土料理「こづゆ」です。ホタテの貝柱を使ったこづゆには、舟運と会津の風土が大きく関係していました。



阿賀川を遡り 運ばれた海産物

うまみたっぷりのホタテの貝柱でだしをとり、里芋やにんじん、糸こんにゃくなどを盛り込んだ薄味のお吸い物を、浅めの会津塗の器でいただく。福島県会津地方で江戸時代からごちそうとして食べられてきた「こづゆ」は滋味深く、口にするるとほっとする。

磐梯山を含む奥羽山脈や越後山脈に囲まれた雪国の会津では、阿賀川(注1)や只見川を遡上するサケやマスが人々の重要なたんぱく源だった。流通網が発達していなかった時代、新鮮な海産物の入手は難しく、北前船によって北海道から新潟港を経由して運ばれる乾物が中心で、身欠きニシンや棒鱈、こづゆの具材として欠かせないホタテの貝柱などが入ってきた。そのため会津では生の魚介ではなく、乾物を用いた料理がハレの日のごちそうとして食べられるようになった。

乾物は、会津にどのような届けられたのだろうか？2010年まで福島県立博物館で民俗分野の学芸員を務めた佐々木長生さんに尋ねた。

「新潟港に入った乾物類は、平田

舟に積み替えられると阿賀川を遡り、会津藩の西の玄関口として栄えた川湊、津川(注2)まで運ばれました」

新潟から津川までは流れも穏やかで早くから舟運が行なわれていたが、津川より上流の塩川湊までは激流で、特に徳沢と上野尻間の「銚子の口」は難所のため、越後街道を陸送せざるを得なかった。

「舟が通れないところでは『中追馬』といって、馬の背に荷物を載せて運びました。空になった舟は舟引が綱で引いて川を上ったのです」と佐々木さんは話す。

そして流れが穏やかになると再び舟に積まれ阿賀川を遡り、塩川湊へ。そこで乾物は荷揚げされ、人の背で会津の各地へ届けられた。

お腹いっぱいになるまで何杯でも

こづゆの発祥にはいくつか解釈がある。中国から伝わった精進料理が会津藩の武家料理となり庶民の間に広まった説。また、江戸時代初期、大晦日や正月の初市などでお神酒と一緒にふるまわれたが、必ず里芋が入っていたことから、里芋を重んじる日本古来の習慣(注3)が根底にあるという説も。

「貝柱は高級品ですから、昔はこ

づゆに使う貝柱の数がもてなしの度合いを表していたんです。あそここの家は貝柱がたくさん入っていたのに、この家は少ないなんて。おもしろいよね」

そう言って笑うのは、会津居酒屋「籠太」の店主で、会津郷土料理研究会を主宰する鈴木真也さんだ。籠太で、鈴木さんにこづゆのつくり方を見せてもらった。

使う具材は貝柱、里芋、にんじん、キクラゲ、糸こんにゃく、白玉麩、季節の青味(今回は水菜)の7種。奇数で縁起がよいからだ。籠太では最初に日高昆布とかつおぶしでだしをとり、一口大に刻んで下ゆでした具材、貝柱および貝柱を戻した汁を加え、酒と塩としょうゆで味を調える。つくり方はシンプルですが、具材を戻す、里芋のぬめりを取るために下ゆでした野菜を洗う工程などは手間がかかります」と鈴木さん。

できあがったこづゆは、元は吸い物の蓋として使われていた、小ぶりで浅めの専用椀に盛られる。これはお代わりを当然としており、「お腹いっぱいになるまで何杯でもどうぞ」という会津のおもてなしの心が込められている。こづゆなら祝い事などの正式な席でお代わりをしても失礼にあたらぬ。



1 会津若松市内を流れる阿賀川。会津と日本海側との重要な交通路だった 2 阿賀川の舟を綱で引き上げる江戸時代の人々を描いた絵画『曳き舟の図』(個人蔵) 3 会津の歴史・民俗に詳しい佐々木長生さん 4 郷土料理と地酒を供する「籠太」の鈴木真也さん。郷土料理を伝える活動も行なう

(注3) 里芋を重んじる日本古来の習慣

里芋は古くから農耕儀礼や儀礼食に用いられ、稲の伝播より古いとも推定される。また、正月に餅を食べずに里芋を食べる地域も各地にあり、「芋正月」と呼ばれる。

(注2) 津川

津川町は新潟県東蒲原郡にあった町。2005年の町村合併で消滅した。現在は新潟県に属するが、古くは会津藩の領地で、舟運で栄えた。

(注1) 阿賀川

福島・新潟県を流れる一級河川。福島・栃木県境の荒海山が源流で、会津盆地で猪苗代湖を源流とする日橋(にっばし)川と合流。さらに尾瀬に源を発する只見川とも合流し、新潟県に入ると「阿賀野川」と名を変え、日本海に注ぐ。



こづゆのつくり方



1

具材は、貝柱、里芋、にんじん、キクラゲ、糸こんにゃく、白玉麩。これに季節の青味(水菜)をいただく直前に加える



2

昆布とかつおぶしでだしをとり、貝柱戻して汁をつくる。しょうゆと塩と酒で味を調える



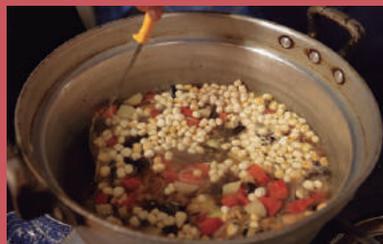
3

一口大に切った里芋、にんじん、キクラゲ、糸こんにゃくを別の鍋でゆでて、一度水洗いする



4

ざるにあげて水洗いした具材を鍋に戻し、そこに貝柱のスープを入れて少し煮込む



5

仕上げに麩を入れる。麩は、お祝い事には上が赤い「魚の子麩」を、法事には「白玉麩」を使い分けていた。魚の子麩はかつてイクラを使っていたことの名残と考えられる



今でもこづゆは家庭料理の定番

意外なことに、会津では正月におせち料理を食べる習慣がない。

鈴木さんが子どものころの主な正月料理といえば、サメの煮つけ、サケの粕煮、ニシンの昆布巻き、豆数の子などに加え、大鍋につくったこづゆを毎日のように食べていたそう。今でも正月はもちろん、冠婚葬祭、子どもが帰省したときなど特別な日にこづゆをつくる家庭は多い。

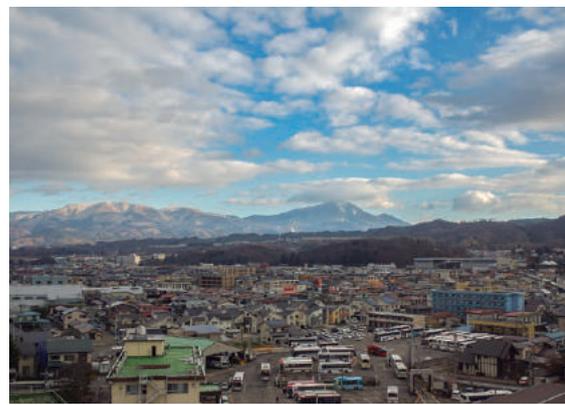
「私が郷土料理の研究を始めた理由の一つは、こづゆがなくなることに嫌だったから。つくる手間を面倒だと思えば、こづゆは家庭から消えてしまいます」と鈴木さん。

鈴木さんの開く料理教室では、こづゆの回は通常よりも参加者が増える人気ぶりという。一方、材料をレトルトのパックにまとめた「こづゆセット」も会津のスーパーや土産物店で販売されている。鈴木さんは「手軽で便利だけど、やっぱり家庭の味がいいばん。昔はこづゆができなきや嫁じゃない！なんて言われたけどね」と笑う。ちなみに、会津に

は「ざくざく煮」というこづゆに似た郷土料理もあるが、鈴木さんいわく「貝柱ではなくサケのアラを使うこと、大根が入っている点が違う」とのこと。

文化が蓄積する会津特有の風土

「会津」という地名の由来が、日本最古の歴史書『古事記』にあると佐々木さんが教えてくれた。8世紀の崇神天皇の時代、諸国平定のための任務を終えた大毘古命(おほひこのみこと)と建沼河別命(たけぬまがわべのみこと)が出会った場所が「相津」と呼ばれ、のちに「会津」になったという。



山に囲まれた会津若松の市街地

佐々木さんによると、神々が出会う場所、つまり文化が合流する場所が会津であり、阿賀川や只見川は文化の通り道なのだ。

「会津は、周囲を山に囲まれた盆地で、しかも豪雪地帯ですから文化が入りづらい。けれど、いったん入ったものは通過せずに留まり、共存していく特色があります。例えば正月には棒鱈を食べるなど、ほかの地域ではすでになくなってしまう習俗が、会津には今も残っていたりするので」

和船と人が運び、外の文化を留めるといふ会津特有の風土のなかで根づいたこづゆ。これからもこづゆが継承されていく未来を願う。

(2018年12月13日取材)



取材協力：会津居酒屋「籠太」
福島県会津若松市栄町8-49
Tel.0242-32-5380
(17:00~23:00/日曜休【不定期】)



夢を抱いた人々の開拓軸

川系男子坂本貴啓さんの案内で、編集部の面々が全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人とのかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。

後志利別川

しりへし としへつ がわ

未開の川を拓く

「後志利別川」という難解な川の名前をご存知でしょうか。「シリベシトシベツガワ」と読み、早口言葉のような名前なのですが、語源を考えると、少しわかりやすくなります。北海道には「ベツ」と

いう音が含まれる川の名前が多いのですが、この「ベツ」は、アイヌ語で「川」を表します。沢くらの小川は「ナイ」と呼ぶなどアイヌ語にはいろいろな音があるのです。「トシ(トゥシ)」は「縄」や「蛇」を指します。つまり、「後志利別川」の語源をたどれば、「後志

地方にある大きな曲がりくねった川」と読み解くことができます。

この後志地方はほとんど未開に近いものでした。江戸時代以降、本州から新たに渡ってきた人々はこの地に夢を抱いてやってきます。今回は後志利別川に沿って、人々の夢の跡をたどってみました。

ゴールドラッシュに沸いた川

流域の上流域部分を占めるのが今金町いまかねまちです。上流域には人を魅了するだけの鉱物資源がありました。今金はどんな地域なのか、今金町地域おこし協力隊の木元希さん、小田島裕一さん、杉村明吉さん、



109水系 1964年(昭和39)に制定された新河川法では、分水界や大河川の主流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

道南唯一の一級河川「後志利別川」。サクラマスやアメマスなどが遡上する美しい川だ



1 美利河ダム周辺に広がる砂金の採掘跡。点線部分が水路の痕跡。石を積んで水路をつくり、水の力で砂礫を洗って砂金を採ったと考えられる 2 上流域を案内してくださった皆さん。右から今金町地域おこし協力隊の木元希さん、杉村明吉さん、小田島裕一さん、今金町教育委員会学芸員の宮本雅通さん 3 幕末のころの美利河付近が描かれた『クナ井砂金山絵図』（新潟県佐渡市西三川笹川区会蔵）。佐渡の西三川砂金山（pp.15-17参照）の鉱夫が技術指導に訪れたことを示す史料

今金町教育委員会の学芸員の宮本雅通さんに聞きました。

「今金は、今でも金が出る場所です」とジョークを飛ばすのは、木元さん。地名の由来は明治期の入植者、今村藤次郎と金森石郎の姓から一文字ずつとったことによるようですが、金とあながち関係なくもないのです。

「今金の開拓史を語るうえで欠かせないのが、鉱山です」と宮本さんは言います。「今金から美利河にかけての後志利別川上流域には砂金を発掘した遺跡が多く残っています。寛永年間（1624-1644）から砂金掘りが行なわれていたと考えられています。幕末には佐渡金山の鉱夫が美利河に技術指導に来ていたことを示す美利河地域の絵図が佐渡に残っています」

美利河ダム周辺の砂金採掘が行なわれていた場所に行くとき小さな起伏のある森がいくつも点在しています。近くの丘陵地には、2mほどの幅の切れ目があります。これは砂金を採るために掘られた水路の跡とされています。

一溝掘って隣に移動を繰り返して、周辺の土砂から隈なく採掘した



そうです。その面積は美利河周辺数万km²に及ぶといわれています。砂金の採掘をしていたのはひと儲けしようと考えた人々です。このゴールドラッシュに夢を抱いた人も多くいたことでしょう。

明治時代後半に、軍事産業の関係でマンガンの需要が高まってくると、美利河では砂金に変わってマンガンの採掘が盛んになりました。それにより美利河周辺は大変賑わったようですが、太平洋戦争終戦後の閉山に伴い、鉱山集落も一気に衰退してしまいました。

今でもどこかに金脈が眠る美利河の丘陵地に身を置き、当時の鉱山の栄光に想いをはせました。

後志利別川とインマヌエル

開拓の夢は中流域にもありました。中流域の利別原（現在の今金町神丘）にはまだ手つかずの川と丘陵地が広がっており、人が入るには

4 瀬棚に移り住んだ荻野吟子が結成した「瀬棚淑徳婦人会」。吟子は後列右端の人物 せたな町教育委員会蔵 5 中流域の丘陵地にひっそりと建つインマヌエル教会 6 せたな町教育委員会事務局学芸員の工藤大さん 7 広々とした後志利別川の中流域と、せたな町中心部に吟子の功績を伝えるために建てられた像



過酷な環境でした。ここに新たな理想郷を夢見た人たちがいました。せたな町教育委員会の工藤大さんまさるに中流域の開拓についてお話を聞きました。

「この今金の地の開拓には、志方しかた之善ゆきよ・荻野吟子おぎのきんこ夫妻の活躍なしには語れません」と工藤さんは言います。夫の志方之善は27歳のときに北海道に渡り開拓に挑みます。この何もない地だからこそ、自由な秩序をつくって、誰もが幸せに



坂本 貴啓

さかもと たかあき

国立研究開発法人
土木研究所
水環境研究グループ
自然共生研究センター
専門研究員

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室「川と人」ゼミ出身。博士(工学)。2017年4月から現職。

私の川巡りの際のこだわりの一つとして、行った川の名前の入った看板を写真として記録に残しています。そのなかでも、北海道の川の看板はぜひ注目してもらいたいです。支川にまで細やかに看板があり、川名の由来まで書かれているからです。北海道の地名は多くはアイヌ語由来のものが多いですが、アイヌ語でどういう意味なのかが解説してあり、その川の特徴を先人がどう捉えていたかがわかります。

後志利別川に行った際にすべての支川を回って来て、写真を撮ってみました。語の意味は、魚が採れるかどうかだったり、生活拠点(納屋、舟をつくる場)だったりアイヌ民族の生活の視点で名づけられており、川を身近に感じていたことが窺えます。

後志利別川

| | | | |
|-----------|--------------------------|------|-------|
| 水系番号 | : 9 | 63位 | / 109 |
| 都道府県 | : 北海道 | 91位 | / 109 |
| 源流 | : 長万部岳 (972 m) | 80位 | / 109 |
| 河口 | : 日本海 | 42位 | / 109 |
| 本川流路延長 | : 80 km | 97位 | / 109 |
| 支川数 | : 29 河川 | 100位 | / 109 |
| 流域面積 | : 720 km ² | 95位 | / 109 |
| 流域耕地面積率 | : 11.7 % | 108位 | / 109 |
| 流域年平均降水量 | : 1231.1 mm | 104位 | / 109 |
| 基本高水流量 | : 1600 m ³ /s | | |
| 河口の基本高水流量 | : 3191 m ³ /s | | |
| 流域内人口 | : 1万1204人 | | |
| 流域人口密度 | : 16人 / km ² | | |

(基本高水流量観測地点: 今金(河口から16km地点))
河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量(基本高水流量-基準点の集水面積)
データ出典: 「河川便覧 2002」(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面)



【後志利別川流域の地図】
国土交通省国土数値情報「河川データ(平成21年)、流域界データ(昭和52年)、ダムデータ(平成26年)、鉄道データ(平成28年)、高速道路データ(平成28年)」より編集部で作図

理想郷を思わせるほどの美しき、魅力のある後志利別川ですが、北海道にしては多くの雨が降る流域です(美利河1年間1700mm)。古くから相次ぐ大洪水と、農業用水の不

日本初のダム付き 長距離魚道

理想郷を思わせるほどの美しき、魅力のある後志利別川ですが、北海道にしては多くの雨が降る流域です(美利河1年間1700mm)。古くから相次ぐ大洪水と、農業用水の不

暮らせる場所にしたいと夢を描きます。キリスト教徒であった志方はこの未開の地に、キリスト教の理想郷として「インマヌエル」(注1)を築こうと奮闘します。原野を拓き、土地を耕し、人が暮らせる地になるように少しずつ開拓を続けますが、それを支えつづけたのが妻の荻野吟子でした。
吟子は日本初の女医(公式な医師免許)として東京で開業し、北海道で奮闘する夫・志方に開拓のための資金を送りつづけます。その後、吟子も北海道に渡り、今金の開拓を手伝いました。しかし、開拓は厳しい自然の前に困難を極め失敗に終わり、下流の瀬棚に引き返して暮らしたといえます。

二人の理想郷建設の夢は破れてしまいました。100年経った現在、今金の地は流域の中核市町村の一つとなっており、これにちなんでインマヌエル教会が置かれています。

理想郷を思わせるほどの美しき、魅力のある後志利別川ですが、北海道にしては多くの雨が降る流域です(美利河1年間1700mm)。古くから相次ぐ大洪水と、農業用水の不

川名の由来【後志利別川】

アイヌ語の「ツウシベツ」(山の走り根・大きい・川)あるいは「トウシ・ベツ」(縄・川)によったものと考えられており、十勝地方の利別川と区別するため「後志」と冠したものである。北海道開発局河川看板より

足に見舞われたため、1991年(平成3)、上流域に美利河ダムが建設されました。
ここにはダム周辺までサクラムス、アメマス、アユがたくさん上ってくるのですが、通常だとダムまでしか上ることができません。ダムより上流にもなんとか上らせてあげたいと日本で初めてつくった長距離魚道(注2)があります。美利河ダム管理支所の山本裕さんにお話を聞きました。
「美利河という地名はアイヌ語の美しいというところから来ています。今でも水もきれいで美しいところ。1997年に河川法が改正され、環境が河川の目的として追加され、流域住民の河川環境に対する意識も高まり、ダムの環境への影響をなんとか軽減させた」といふことで、ダム湖よりも上流の川に魚が上れる2・4kmの魚道が新設されました」

この魚道には、魚が上りやすくなるようにさまざまな工夫が盛り込まれています。ダム直下はコンクリート張りですぐな河道になっっていることが多いですが、自然の川にならぬ、蛇行させることで魚が泳ぎやすい深さを確保しながら、魚道入口まで導きます。

(注2)長距離魚道

2018年10月の取材時は美利河ダムの2.4kmが日本一の長さの魚道だったが、2019年度にサンダム(天塩川水系)が完成すると、日本最長の魚道は7kmとなる。

(注1)インマヌエル

キリスト教徒移住者によって築かれた今金の地の集落をヘブライ語の「インマヌエル(意味:神とともにいます)」から名づけ、キリスト教徒の理想郷として開拓を行なった。



2007



2011



8 美利河ダムを越えて上流まで魚類が上れるように階段状に設計された長距離魚道。遡上する魚の様子が見られる「観察窓」も設置されている 9 美利河ダム管理支所の山本裕之支所長 10 多自然魚道の施工時と4年後の様子。違いは一目瞭然だ 提供:美利河ダム管理支所 11 重力式コンクリートとロックフィルの複合型の美利河ダム。1991年竣工



8

呼ばれる魚道を行き交う魚たちが休息できるたまりがあります。プールを出て、いよいよ魚道に入った魚は階段になった魚道を少しずつ上ります。湖上流の河川に上らせるため、距離は長いですがダム湖に入ることなく、確実に上を目指していきます。これが日本一の長さの魚道になったゆえんです。階段を上っている魚の姿は、魚道の途中の側面に設置された「観察窓」から見られるようになっていきます。魚道のなかには、自然の川と同じように再現された「多自然魚道」まであります。瀬淵があったり、木陰があったりと自然に近いので、ここで産卵する魚もいるくらいです。



国土地理院基盤地図情報「北海道」、および美利河ダム管理支所提供の資料より編集部で作図

また、ダム湖に迷走しないように、区切りも設置されています。区切り側に魚が寄らないように、反対半分にひさしをつけて暗くして、陰を好む魚の特性を利用してうまく誘導しています。このようにダムを越えて魚が上流を目指すきめ細かな配慮がされた魚道は当時の最先端の河川環境研究の英知が凝縮されたものであり、美しい美利河を今に伝える努力の賜物だと思います。

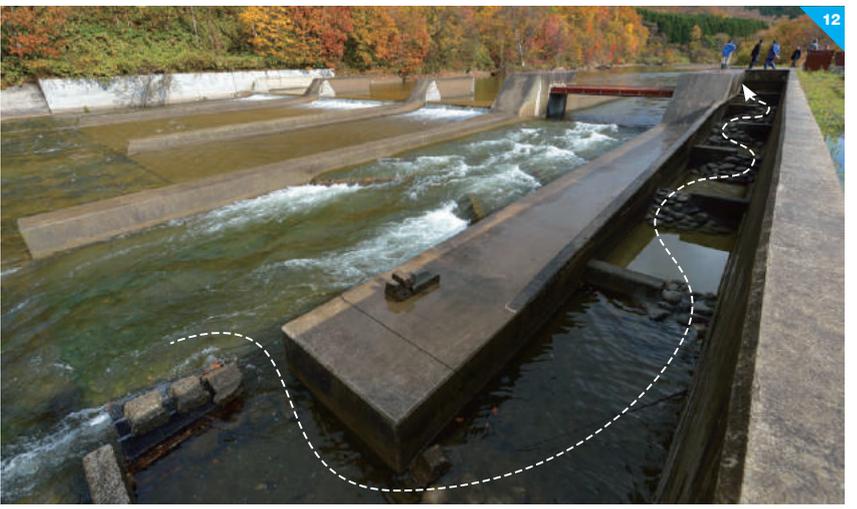
清流日本一のプライド
こうした努力もあり、後志利別川は今でも人々を魅了する川です。2018年現在で「清流日本一」最多18回の記録をもっていますし、清流日本一を維持していくために地域で連携して河川環境の保全が取り組まれています。この清流日本一の川を管理している今金河川事務所の秋山泰祐さんと伊藤祐明さんにお話を聞きました。「後志利別川には、美利河ダムの上流まで上れる魚道があるので、下流の堰の魚道もなんとか上りやすくしてあげて、美利河の魚道までつなぎたいという思いから自分たちの力でできる魚道の改良をはじめました」



13



14



12

12 改良した住吉頭首工の魚道(右端)。流れに変化をつけて魚が上りやすいようにした 13 「清流日本一」を維持する取り組みについて語る今金河川事務所の秋山泰祐所長(右)と伊藤祐明副所長(中)、NPO法人後志利別川清流保護の会の竹内正夫理事長(左) 14 2018年6月20日に行なわれた河口清掃の集合写真 提供:今金河川事務所

がら、改良した魚道を解説していただきました。

「既設の魚道もあまりよくないので、底生魚や遊泳魚も上りやすいようにできないかと魚道を石組みにより自分たちで変えました。練り石^{（接着した石）}をつくり、流れを変え魚が上りやすいように改良しました」

川にくわしい市民の方や技術者の方などの有志で、ほとんどお金をかけず（セメント材料など数万円程度）つくったそうです。このほかにも同頭首工の魚道の隣にある土砂吐き水路に魚が遡上しやすくするための丸太設置なども自分たちで行ないました。こういう自分たちの手で環境をよくできるという実感をもてる優れた取り組みが全国に広がるといいなと思いました。

河川事務所だけでなく地域も清流日本一の維持のために主体的にがんばっています。NPO法人後志利別川清流保護の会の竹内正夫さんにお話を聞きました。

「開発さん（河川管理者）が普段からこんなに自分たちの地域の川のたれにがんばってくれているんだから、地域の者も何かできることないかと始めたのがきっかけです」

竹内さんたちは流域の小学生の生物調査のサポート、河口での河

川清掃、水源地の植樹などを毎年行ない、清流にふさわしい美観を維持するために活動しています。

「清流日本一といわれ、しかも毎年なんだから、俺らも黙っておられんと奮い立たされます」

清流日本一の称号が地域の誇りとなり、川への愛着を深めているようです。たしかに、今金町役場の前を通ると、清流日本一の垂れ幕が掲げられており、これこそが清流日本一に対する地域の誇りの表れだと実感しました。

港町での一攫千金を求めて

下流域にも人々を引きつける場所がありました。河口近くの、せたな町には古くからの港町が広がっています。北前船も泊まる港町として栄えました。ここにも一攫千金の夢がありました。工藤さんに再びお聞きしました。

「松前藩は、年貢米で部下を賄えないので、代わりに部下に交易権を渡し、その儲けを自身の収入にできるようなしくみをとりました。交易の拠点^{（うんじょうや）}は運上屋といわれ北海道の産物が多く出荷されました」

あまり拓かれていないこの地だからこそその制度とも言え、この出来高払いに魅力を感じ、精を出した部下も多かったことでしょう。

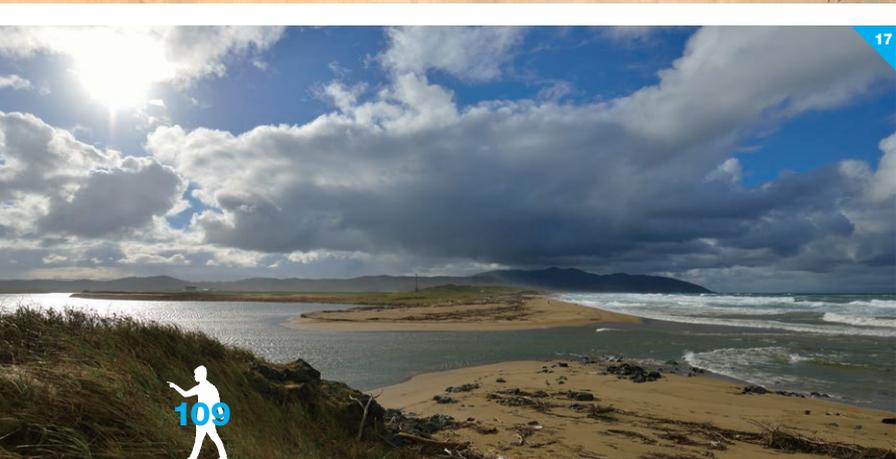
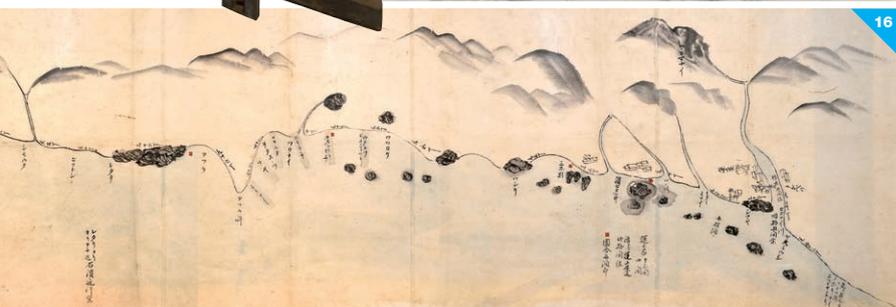
「また、明治時代に入るとニシン漁が盛んになり、春の漁期になると、出稼ぎ者が多く訪れ、ニシン漁で非常に栄えました」と工藤さんは言います。ニシン漁により、ニシン御殿という豪邸が立ち、ニシン長者と呼ばれる人が生まれたほどです。一攫千金を目指してよそから来てみたくなる魅力が十分にあったのでしょう。

開拓軸としての後志利別川

後志利別川流域は、フロンティ

ア精神をかき立ててやまない川と言えそうです。上流域では鉱石採掘に夢を抱いた人々が、中流域では理想郷の開拓を夢見た人々が、下流域では自由な交易権とニシン漁に一攫千金を夢見た人々がいました。それぞれの時代に、それぞれの場所に対し、理想の暮らしを夢見て、多くの人がやってきました。この地を流れる後志利別川は開拓地の片鱗をつなぐ一つの軸といえるのではないのでしょうか。

（2018年10月29〜31日取材）



15 ニシン漁で栄えたせたな町で保津船に乗り込む大正初期の漁師たち（せたな町教育委員会蔵）と、せたな町で保管・展示しているニシン粕をつくるための庄搾機 16 運上屋が描かれている「セタナイ場所絵図」。安政年間（1854-1860）以降のもの（せたな町教育委員会蔵） 17 後志利別川の河口。この流域には、かつて夢を抱いてさまざまな人たちがやってきた

ミツカン水の文化センター ホームページ リニューアル!

2019年2月より水の文化センターのホームページが新しく生まれ変わりました！センターの旧ホームページに保存されていたたくさんの情報をより閲覧しやすい形にリニューアルしました！操作性だけではなく、デザインの向上も図りましたので、「水の文化」の魅力を多くの方に感じていただければ幸いです。ぜひ <http://www.mizu.gr.jp> をご覧ください。



新サイトのここをチェック!

Check 1 「水の文化」の魅力を伝える美しい写真をふんだんに掲載しました!



Check 2 地域やテーマなど、複数のキーワードでコンテンツを探すことができます



Check 3 センターオリジナルの地図や年表などを資料室にまとめ、数も充実させました!



Check 4 全ページがスマートフォン対応になりました



水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■「水にかかわる生活意識調査」ホームページで公開中

20年以上にわたり、ほぼ同じ内容で日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化に関する生活意識調査を実施しています。結果はすべて公開していますので、ぜひご利用ください。

皆さまの感想を お待ちしております！

『水の文化』61号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form61.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて
下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX: 03-3568-4025

メールアドレス: mizubun@mizu.gr.jp

編集後記

朱鷺、表紙のその美しい姿を見ると、学生の頃に聴いた「前夜」という曲を思い出します。その歌詞は物悲しさがあり、何か考えさせるものですが、61号でお伝えする「佐渡」は、未来への可能性、そこに住む人の魅力に溢れ、機関誌21年目のスタートにエールを送ってくれているように感じます。(五)

最近よく聞く「関係人口」という言葉、この佐渡にも応援団ともいえる関係人口が増えているようだ。現に取材したMさんも鈴木先生も五十嵐先生も佐渡の魅力に熱く語っていた。文化・歴史・トキ・海の幸・ジオ……。残念ながら訪問できていないので、次は自分の目で魅力を確かめてみたい。(松)

大自然に囲まれた後志利別川の美利河ダムを訪ね、ジョージ初ダムカレーを頂きながら、日本初の長距離魚道を取材した魚がうまく上れるように、魚道の形にとっても工夫を凝らした事が特に印象的だった。大規模な構造物を建てる時に、このように自然環境に対して配慮して欲しいと強く感じた。(FG)

トキを取材する中で、手間のかかるふゆみずたんぼに楽しみながら取り組んでいる齋藤さんの姿が、とても印象的だった。ヒトとトキが共生するために工夫しながら、固定概念にとらわれず、新しいことにも果敢にチャレンジする考え方。自分もそんな柔軟な考え方ができる人になりたいと思った。(青)

学生時代の歴史の授業で確かに勉強したはずなのに、その記憶のほとんどを置き去りにしてきた自分には豊かな自然も、歴史も、文化も、とても新鮮に感じる事ができました。今号は内容がとても詰まっていたけれど、これ以上減らさないで！とお願ひしてしまっただけに魅力的な場所でした。(飯)

佐渡のことは若い時に何度か通ったこともあって、ある程度知っているつもりだった。しかし改めて足を運んでみると、記憶とはまったく違う世界だった。歳を重ねたからか、見方が変わったからなのか、新しい気づきが多い。よく知っていた「つもり」の場所だからこそ、より深みが増した。(力)

食事をするたびに「うまい！」と口に出た佐渡での滞在。深みのある青い海、イワナが潜むという清冽な溪流、天然杉を巡った山で聴いた風の声など、取材以外でも魅力を全身で感じました。そして、なんといっても鳥の人たちが気さくで温かいのです。佐渡の旅、お勧めします。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第61号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2019年(平成31)2月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越皓之 大手前大学学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

浦本五郎

松本裕佳

Fleminger George

青木広実

小林夕夏

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.28-29)

佐々木 聖 (pp.10-17, pp.30-34)

手塚ひとみ (pp.8-9, pp.20-21)

前川太郎 (pp.6-7, pp.18-19, pp.22-27)

開 洋美 (pp.42-44)

撮影

大平正美 (pp.42-44)

葛西亜理沙 (p.14, pp.18-20, pp.23-27)

川本聖哉 (pp.8-9, p.18, p.20, pp.30-33)

鈴木拓也 (p.6)

中野公力 (p.28, pp.45-49)

藤牧徹也 (pp.3-6, pp.10-17, p.22, pp.27-28,

pp.32-34, pp.38-41, p.46)

描画

赤木あゆ子 (p.8, p.12, p.27)

印刷

中埜総合印刷株式会社



ミツカン水の文化センター



表紙: 佐渡島の中央部に広がる国中平野を飛ぶトキ。減農業や生きものを増やす試みがトキをよみがえらせた。佐渡の里山は世界農業遺産にも指定されている (撮影: 川本聖哉)

裏表紙上: 二代広重が描いた「諸国六十八景 佐渡金やま」(文久2年[1862])。山を切り崩し、水の力を用いた西三川砂金山の砂金採取の様子がよくわかる (国立国会図書館蔵) 裏表紙下: 宿根木の海に浮かぶ手づくりのたらい舟。これも佐渡の誇る文化の一つ (撮影: 藤牧徹也)